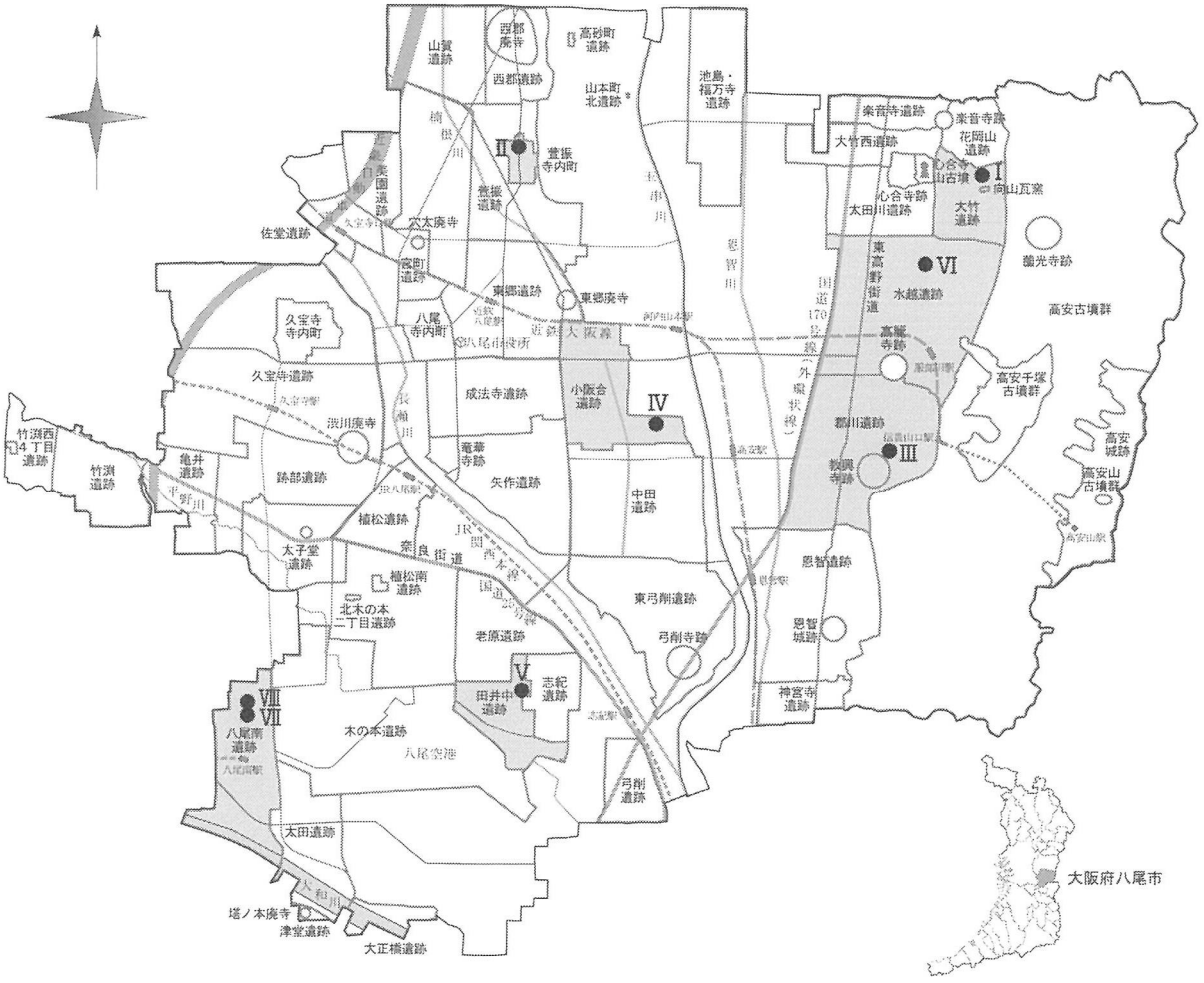
公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告147

Ⅰ　大竹遺跡（第３次調査）
Ⅱ　萱振寺内町（第１次調査）
Ⅲ　郡川遺跡（第22次調査）
Ⅳ　小阪合遺跡（第47次調査）
Ⅴ　田井中遺跡（第21次調査）
Ⅵ　水越遺跡（第17次調査）
Ⅶ　八尾南遺跡（第37次調査）
Ⅷ　八尾南遺跡（第39次調査）

2015年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　大 竹 遺 跡(第３次調査)
Ⅱ　萱振寺内町(第１次調査)
Ⅲ　郡 川 遺 跡(第22次調査)
Ⅳ　小阪合遺跡(第47次調査)
Ⅴ　田井中遺跡(第21次調査)
Ⅵ　水 越 遺 跡(第17次調査)
Ⅶ　八尾南遺跡(第37次調査)
Ⅷ　八尾南遺跡(第39次調査)



2015年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古くは旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では古大和川水系の河川が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に弥生時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人達の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めているところであります。

本書は、公共事業に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成24～26年度に行った７遺跡８件の調査成果が収録されています。いずれも小規模な調査ではありますが、平安時代後期以降、近世に至るまでの遺構や遺物が検出されております。特に萱振寺内町では、平安時代後期および室町時代の井戸が見つかり、寺内町形成以前の居住域の様相を考える上で貴重な資料を得ました。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成27年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長　西浦　昭夫

序

1．本書は公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成24～26年度に実施した発掘調査の報告を収録したものである。
1．本書作成業務は、各現地調査終了後に着手し、平成27年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1．本書の執筆は各調査担当者が行い、全体の構成・編集は西村公助が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１地形図（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成24年度版）をもとに作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位（T.P.）である.
1．本書で用いた方位は座標北（国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕）を示している。
1．遺構名は下記の略号で示した。
　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ　溝－ＳＤ
1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1．土色については、一部の調査を除き『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　大竹遺跡第３次調査（ＯＴ2013－３）……1
Ⅱ　萱振寺内町第１次調査（ＫＦＣ2012－１）……7
Ⅲ　郡川遺跡第22次調査（ＫＲ2014－22）……15
Ⅳ　小阪合遺跡第47次調査（ＫＳ2013－47）……19
Ⅴ　田井中遺跡第21次調査（ＴＮ2013－21）……25
Ⅵ　水越遺跡第17次調査（ＭＫ2014－17）……31
Ⅶ　八尾南遺跡第37次調査（ＹＳ2012－37）……37
Ⅷ　八尾南遺跡第39次調査（ＹＳ2013－39）……43
報告書抄録

Ⅰ　大竹遺跡第３次調査（ＯＴ2013－３）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大竹七丁目地内で実施した御池改修工事に伴う埋蔵文化財遺構確認調査である。

1．本書で報告する大竹遺跡第３次調査（ＯＴ2013－３）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成26年２月25日(外業実働１日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約15.0㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・芝﨑和美の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。
　トレースー西村。

1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．調査概要……2
　1）調査の方法と経過……2
　2）基本層序……2
　3）検出遺構と出土遺物……2
3．まとめ……2

Ⅰ　大竹遺跡第３次調査（ＯＴ2013－３）

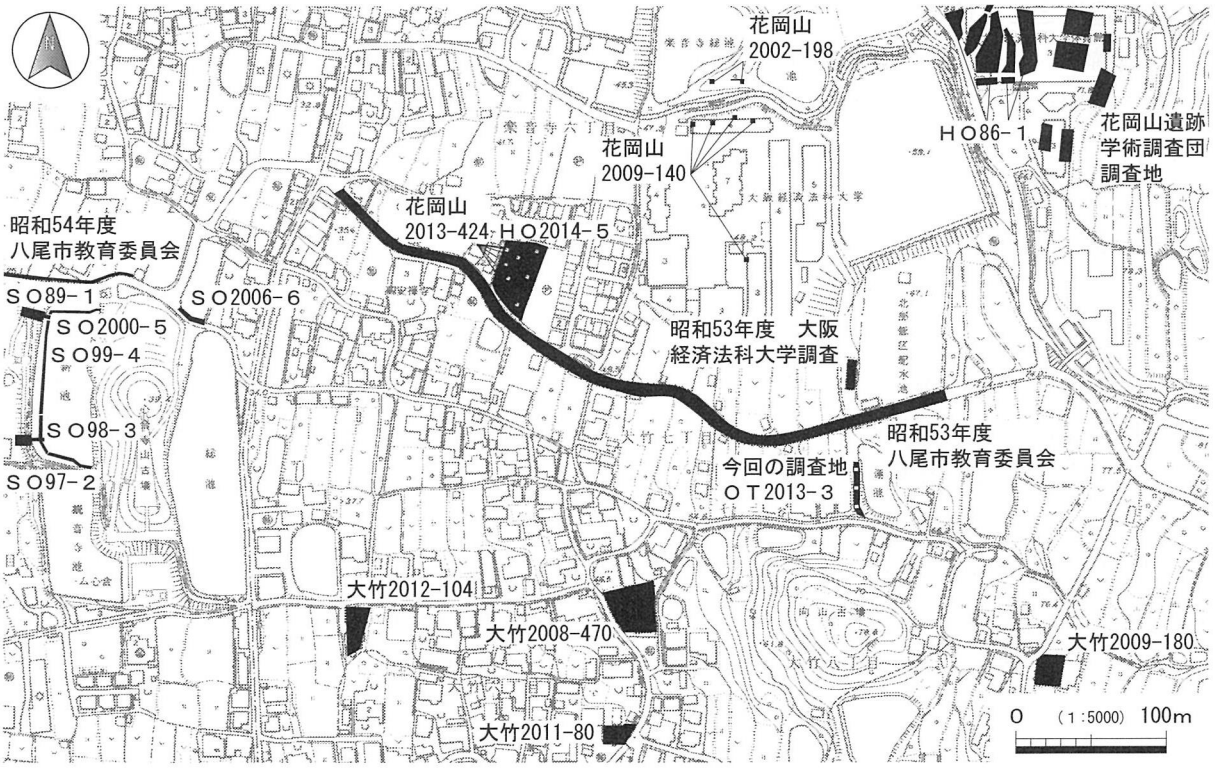
１．はじめに

大竹遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹六～八丁目、水越六・八丁目、神立三・四・六丁目の一部を含む遺跡で、南北約600ｍ、東西約500ｍがその範囲とされる。

地理的には生駒山地西麓の扇状地に位置し、周辺には、北に西の山古墳・花岡山遺跡、東に高安古墳群、南に水越遺跡、西に心合寺山古墳・心合寺跡・大竹西遺跡・太田川遺跡が存在する。当遺跡内には、古墳時代前期の向山古墳や同後期の愛宕塚古墳などが存在し、また、向山古墳の立地する丘陵南斜面には、平安時代の向山瓦窯跡が存在する。

当遺跡内では昭和初期以降、縄文時代に遡る石器が採集されていたが、最初に考古学的な発掘が行われたのは昭和53(1978)年度のことである。この調査は花岡山遺跡との境界となる道路上で実施された水道管布設に伴うものである。調査では、弥生時代後期の土器が大量に出土した大溝や、古墳時代の遺物包含層等が確認されており、同時期の集落の存在が明らかになった(村川1980)。それ以降は小規模な遺構確認調査が数件実施されている程度であり、顕著な遺構・遺物は確認されていないため、遺跡の実態は不明な点が多いといえる。

周辺に存在している心合寺山古墳や愛宕塚古墳については調査が実施されており、心合寺山古墳は全長約160ｍを測る前方後円墳であることが判った。同古墳の墳丘は三段築成で、前方部頂に方形壇、くびれ部西側に造り出しを有することも明らかになった(吉田2001)。また、古墳時代後期の愛宕塚古墳は、府下最大級の横穴式石室をもつ円墳であることが判明している。同古墳の石



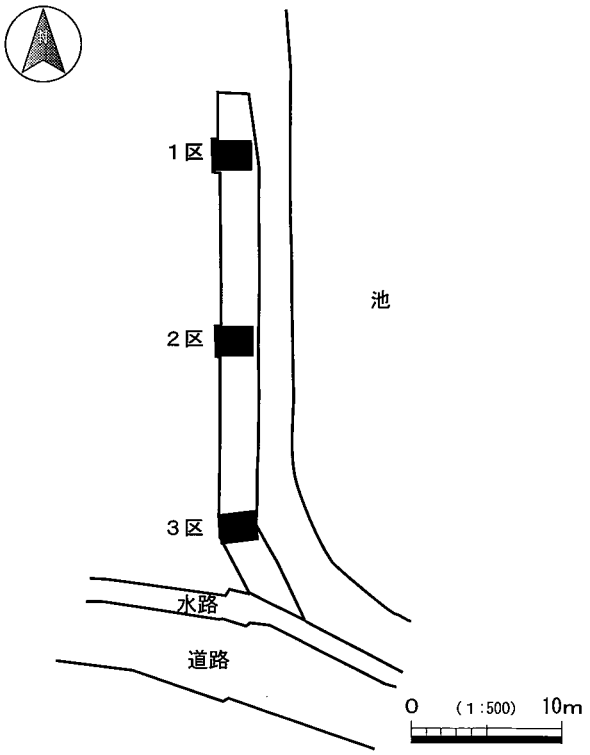
第１図　調査地周辺図

室内からは土器や馬具などの鉄器および副葬品が多数出土している(安井1994)。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は御池改修工事に伴う調査で、当調査研究会が大竹遺跡内で行った第３次調査(ＯＴ2013－３)である。御池の堤体擁壁部分に東西2.5m×南北2.0m、面積約5.0㎡の調査区を３ヶ所(北から１～３区)設定した。調査は堤防上の現地表(約T.P.+64.8m)下約4.3m［西側の現地表(約T.P.+61.8m)下約1.3m］までについて、機械掘削・人力掘削を併用して実施した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10Ａ88(調査地北西側道路上:T.P.+50.000m)を使用した。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

１層は細～粗粒砂混粘土で、大礫を含む。堤防の盛土である。２層はシルト混粘土で、中礫を含む。３層は粗粒砂混粘土で、大礫を含む。２・３層は池を埋め立てた時の埋土である。４層は粗粒砂～中礫の扇状地性堆積層である。

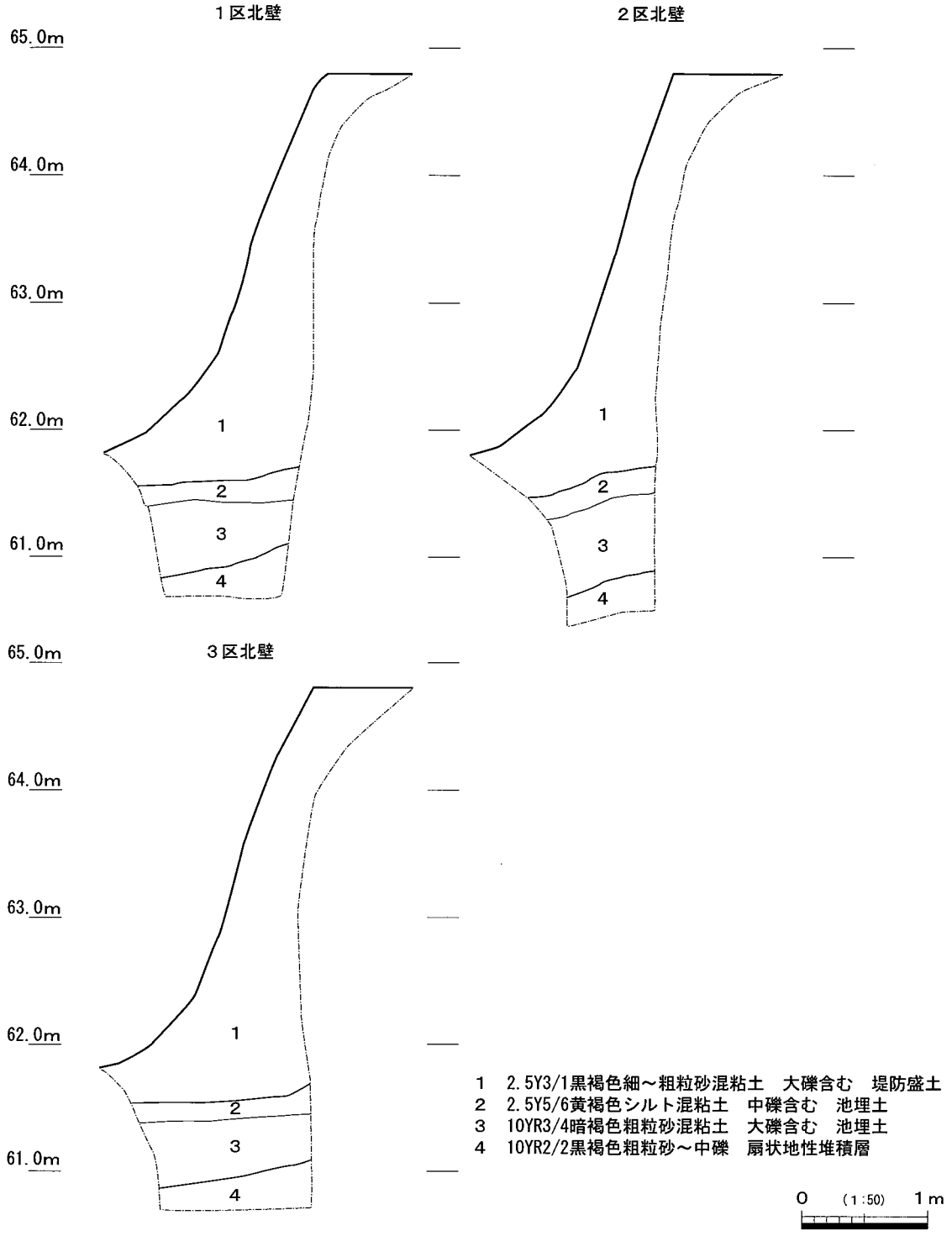
3）検出遺構と出土遺物

検出遺構はなかった。遺物は１層から中世の土師器、瓦器等の細片や近代以降の瓶が出土した。２層からは中世の土師器の細片が出土した。３層からは中世の土師器、瓦器、須恵器等の細片や近代以降と考えられる瓶が出土した。いずれも図化はできなかった。

3．まとめ

調査では東に所在している池の西側堤防の盛土(１層)を確認し、西側に存在していた池(平成８年度八尾市作成2500分の１の地図には池が存在している)の埋土(２・３層)と扇状地性堆積層(４層)を確認した。今回の調査地は、南東から北西に低くなる谷状の地形であり、この谷を堰き止め、池を階段状に作っていた場所であったことが判った。なお、１層の堤防の盛土や２・３層の池埋土からは中世の遺物が出土していることから、近隣に同時期の居住域が存在している可能性が高いと考えられる。

本地の北西約250mで平成26年１月に行った花岡山2013-424では、弥生時代後期前半の遺構や遺物を確認し居住域の存在が明らかになった。今回の調査では弥生時代後期の遺構・遺物はなかったことから、本地より北西部に当該期の集落が展開している可能性が高くなった。



第３図　１～３区断面図

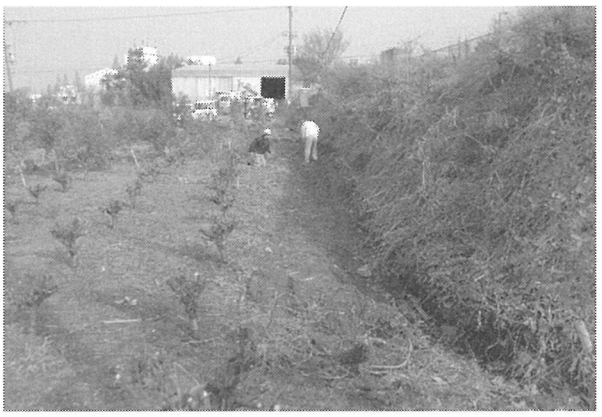
【参考文献】

・村川行弘・瀬川芳則1979『花岡遺跡発掘調査概報』大阪経済法科大学
・村川行弘1980『河内　大竹遺跡―八尾市水道局低区第３配水池送配水管布設用地埋蔵文化財発掘調査報告―』八尾市教育委員会
・山本　昭1980『大竹遺跡』八尾市水道局送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査　八尾市文化財調査報告５　八尾市教育委員会

・安井良三1994『河内愛宕塚の研究』八尾市立歴史民俗資料館
・原田昌則1989「Ⅲ　花岡山遺跡(第１次調査)発掘調査報告書」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告22　財団法人八尾市文化財調査研究会
・吉田野乃2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書－史跡整備に伴う発掘調査の概要－』八尾市文化財調査報告45　史跡整備事業調査報告２　八尾市教育委員会
・坪田真一2015「12　花岡山2013-424の調査」『八尾市内平成26年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告75　平成26年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

調査地周辺（北から）



調査地周辺（南から）

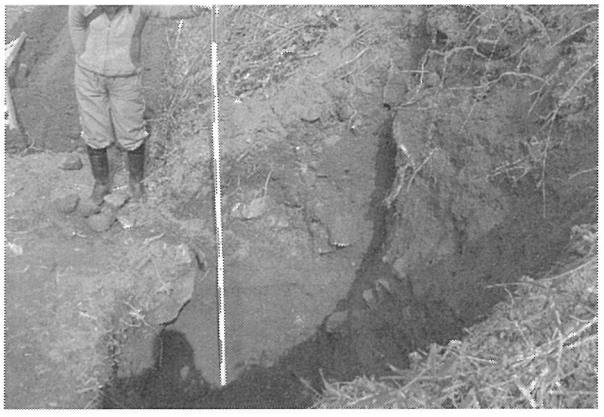
１区全景（南から）

１区北壁１～４層（南から）

２区全景（南から）

２区北壁１～４層（南から）

３区全景（南から）



３区北壁１～４層（南から）

Ⅱ　萱振寺内町第１次調査（ＫＦＣ2012－１）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市萱振町六丁目47で実施した消防団八尾分団萱振分隊消防機械器具置場改築工事に伴う萱振寺内町埋蔵文化財発掘調査である。

1．本書で報告する萱振寺内町第１次調査（ＫＦＣ2012－１）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年12月19日～平成25年１月９日（外業実働６日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約27㎡である。

1．現地調査においては、伊藤静江・國津玲子・芝﨑和美・村田知子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。
　遺物実測・トレースー市森千恵子、その他ー西村。

1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……7
2．調査概要……7
　1）調査の方法と経過……7
　2）基本層序……7
　3）検出遺構と出土遺物……7
3．まとめ……12

Ⅱ　萱振寺内町第１次調査（ＫＦＣ2012－１）

１．はじめに

萱振寺内町は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置している。現在の行政区画では萱振町二・三・五・六丁目にあたり、東西約0.3km、南北約0.4kmがその範囲とされる。なお、当寺内町は、萱振遺跡に含まれていたが、平成24年度からは遺跡名が「萱振寺内町」に変更となった。今回の調査は当研究会が萱振寺内町で行う第１次調査である。

地理的には、旧大和川及びその支流の河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野のほぼ中央部にあたり、周辺には、奈良～室町時代の居住域が存在する西郡遺跡、古墳時代初頭の居住域が見つかっている東郷遺跡、弥生時代前期からの居住域が発見された山賀遺跡が隣接している。

周辺の調査（第１図）では、北側の萱振遺跡第19次調査で、平安時代末期頃の居住域あるいは生産域の関連と考えられる遺構が検出されている（西村1996）。南西側の萱振2009-179では、江戸時代の溝を検出し、『寛永通宝』が出土した。南側の萱振2007-60では、13世紀頃の小穴を検出し、萱振2009-409では、17世紀の土坑を検出した。萱振2008-460では、10世紀後半～11世紀の土坑を検出しており、17世紀後半～18世紀の肥前系磁器碗も出土した。萱振2011-324では、18世紀以降の溝を検出し、15世紀の土器も出土した。萱振2008-323では、17世紀頃の生産域と18世紀以降の井戸を検出した。西側の萱振遺跡第23次調査では、19世紀前半頃の井戸を検出した（岡田2003）。以上から平安時代～近世の集落であることが判明している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

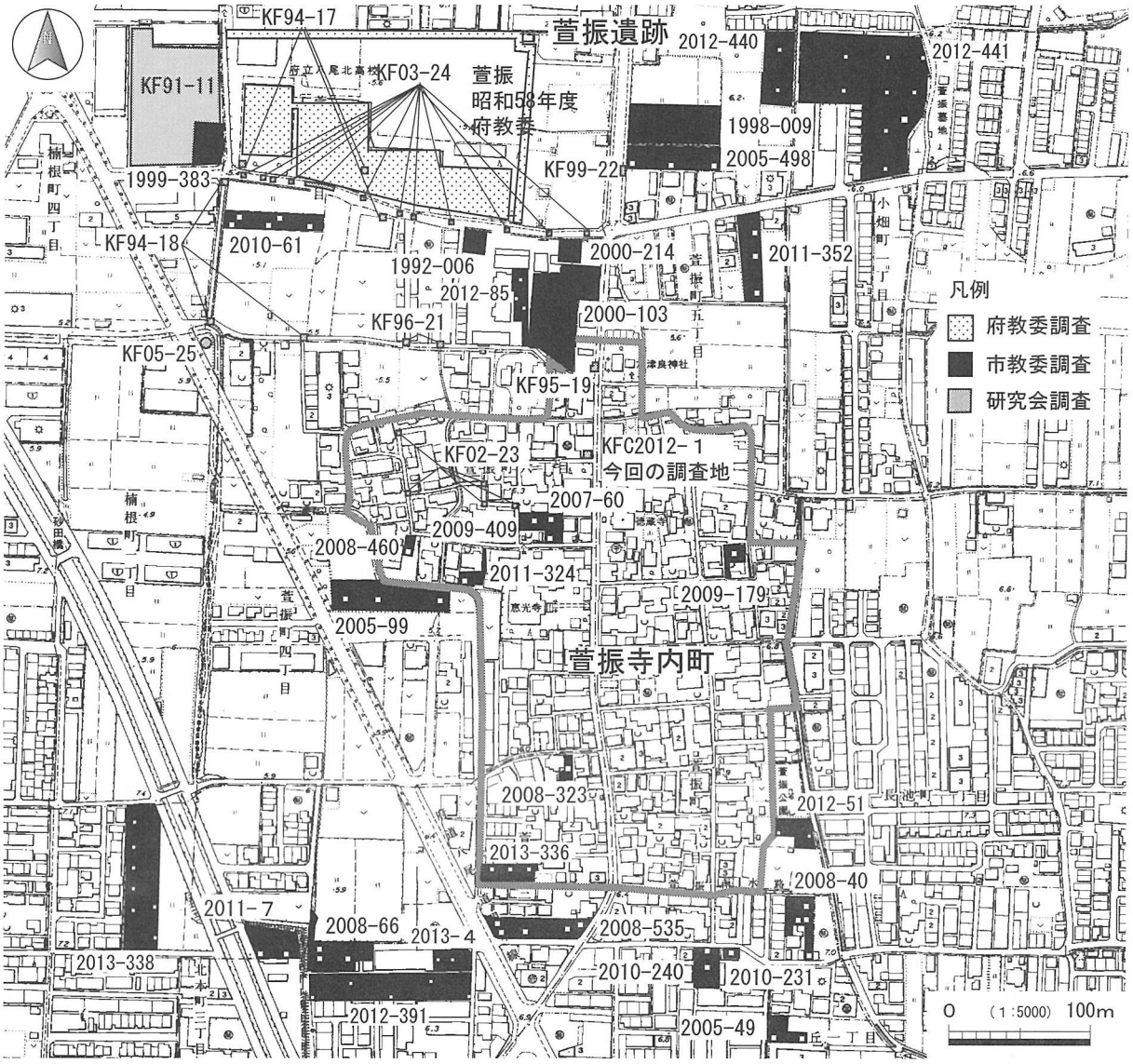
今回の調査は、消防団八尾分団萱振分隊消防機械器具置場改築工事に伴い、6.2×4.35m（面積約27㎡）の範囲を対象に実施した。調査は調査対象範囲を東西に分割して進めた。現地調査では、東を１区、西を２区と呼称した。掘削は、現地表下1.1m前後の地層を機械、以下厚さ0.3mの地層を人力で行った。標高はT.P.値【八尾市街区多角点10B20（南側：T.P.+6.440m）】を使用した。

２）基本層序

現地表下1.7mまでで４層の基本層序を確認した。０層は盛土（T.P.+6.4～6.6m）である。１層は旧耕作土（T.P.+5.8～6.0m）で、近代以降に比定できる。２層は近世に比定できる遺物包含層（T.P.+5.6～5.7m）で、土師器、瓦の細片が極少量出土した。３層は土壌化層（T.P.+5.2～5.5m）で、上面では平安時代後～末期および鎌倉時代末期～室町時代の遺構を検出した。４層は河川堆積層（T.P.+5.0～5.1m）である。

３）検出遺構と出土遺物

１層上面からは近代の井戸１基（ＳＥ101）、３層上面からは鎌倉時代～室町時代の井戸１基（Ｓ



第１図　調査地周辺図

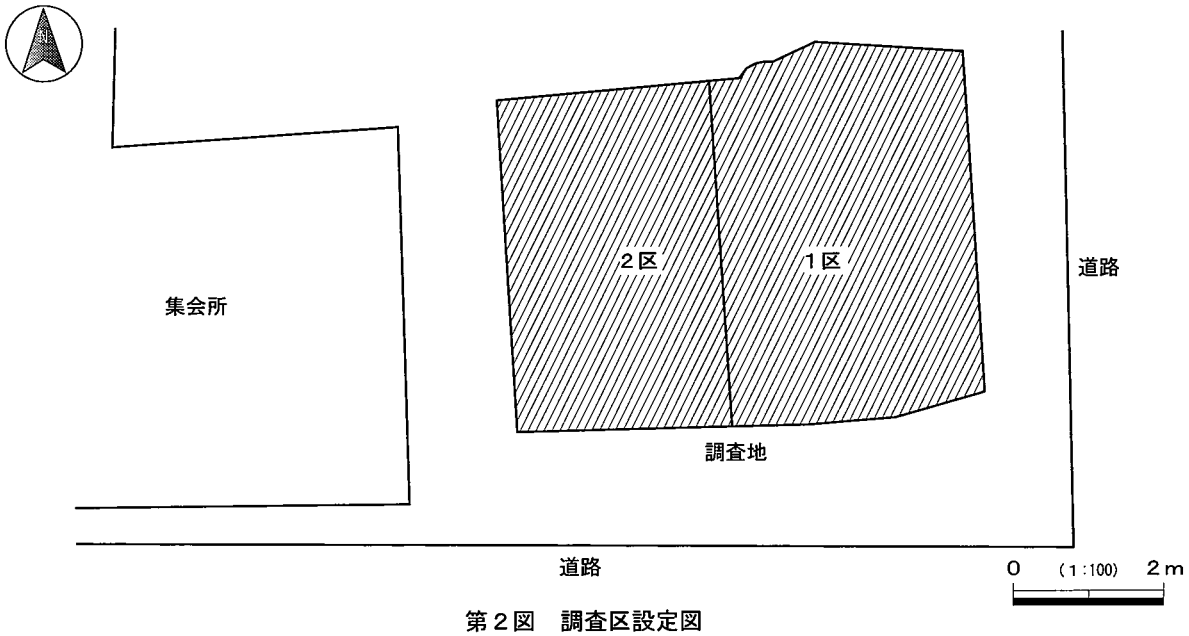
Ｅ102)、平安時代後～末期の井戸１基(ＳＥ103)・小穴５個(ＳＰ101～105)・溝２条(ＳＤ101・102)を検出した。

ＳＥ101

１区の南東隅で検出した。ＳＥ102を切る。南と東は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西1.2m、南北2.4m、深さ1.1mを測り、木板の円形枠の上に瓦を設置していたが、瓦は枠内に倒れている状況で検出した。埋土はⅠ黄灰色粗粒砂混粘土・Ⅱ褐色細粒砂混粘土・Ⅲ黄灰色粗粒砂混粘土・Ⅳ褐灰色細粒砂混粘土・Ⅴ灰色粘土で、井戸枠内からは、瓦、磁器碗などの細片が出土した。この内１点(１)を図化した。１は磁器碗で、18世紀代に比定できる。

ＳＥ102

１区の東側で検出した。ＳＥ101に遺構の南部は切られている。また、東側は調査区外に至るた



第２図　調査区設定図

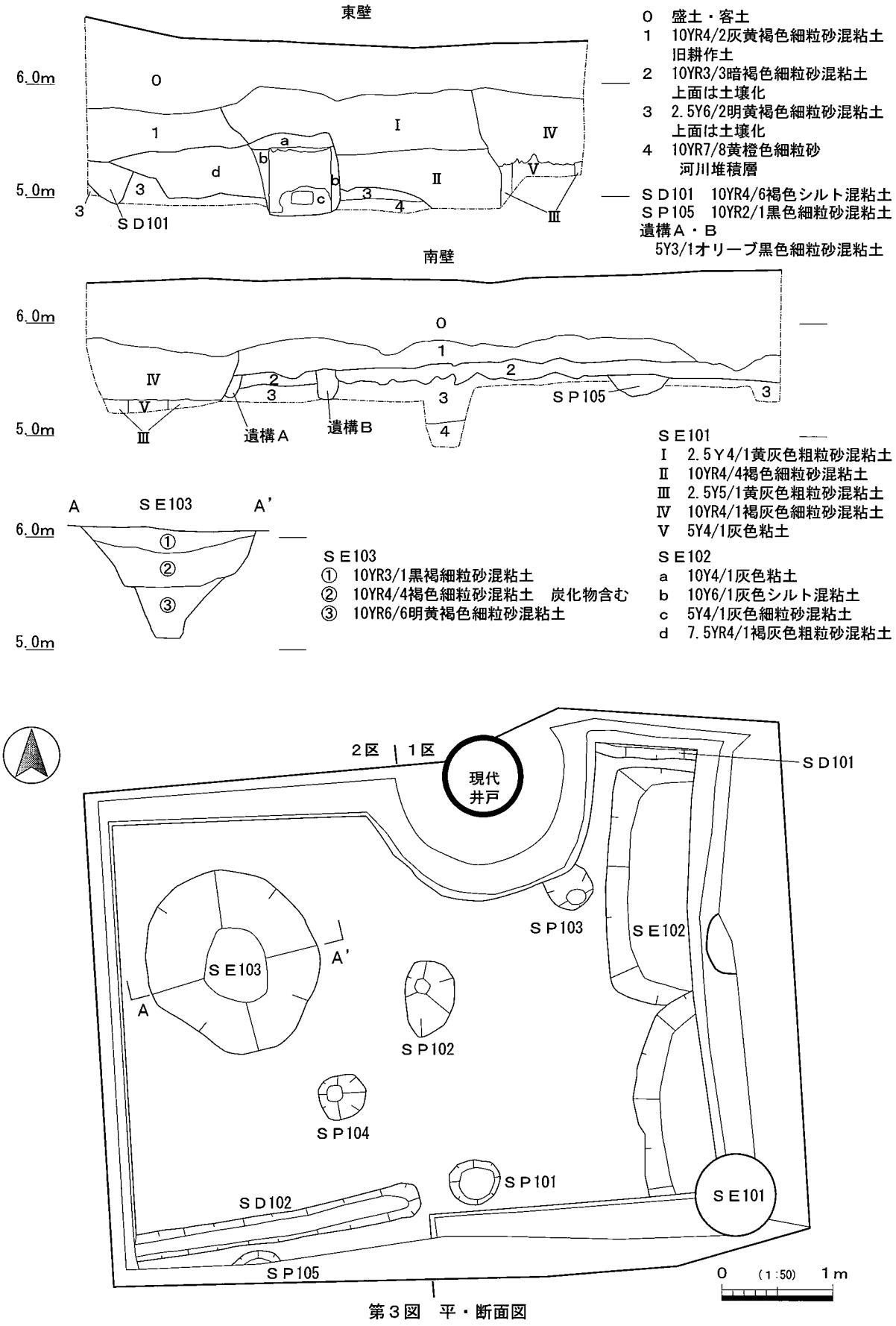
め平面形状および規模は不明である。検出した部分の掘形は、東西1.1m、南北2.1m、深さ0.7mを測り、南部に瓦質の枠を置いていた。埋土はａ灰色粘土・ｂ灰色シルト混粘土・ｃ灰色細粒砂混粘土・ｄ褐灰色粗粒砂混粘土で、掘形のｄ層からは、土師器、瓦質土器等が、枠内のｃ層からは須恵器、瓦質土器などの細片が出土した。この内、井戸枠１点（２）、ｃ層から出土した１点（３）、ｄ層から出土した２点（４・５）を図化した。２は径60cmを測る筒状の瓦質井戸枠である。内面は横方向および斜方向のハケを施す。外面は板状工具によるナデで、工具痕が確認できる。３は瓦質鉢である。体部は上外方へ直線的に伸びる。口縁部は上部へつまみあげ、端部には平らな面を形成する。内面はナデ、外面はヘラケズリを施す。４は土師器小皿である。外反する口縁部で、内外面ともにナデを施す。５は瓦質羽釜である。口縁部は内湾する。鍔部は水平に短く伸びる。内外面ともにヨコナデを施す。

ＳＥ103

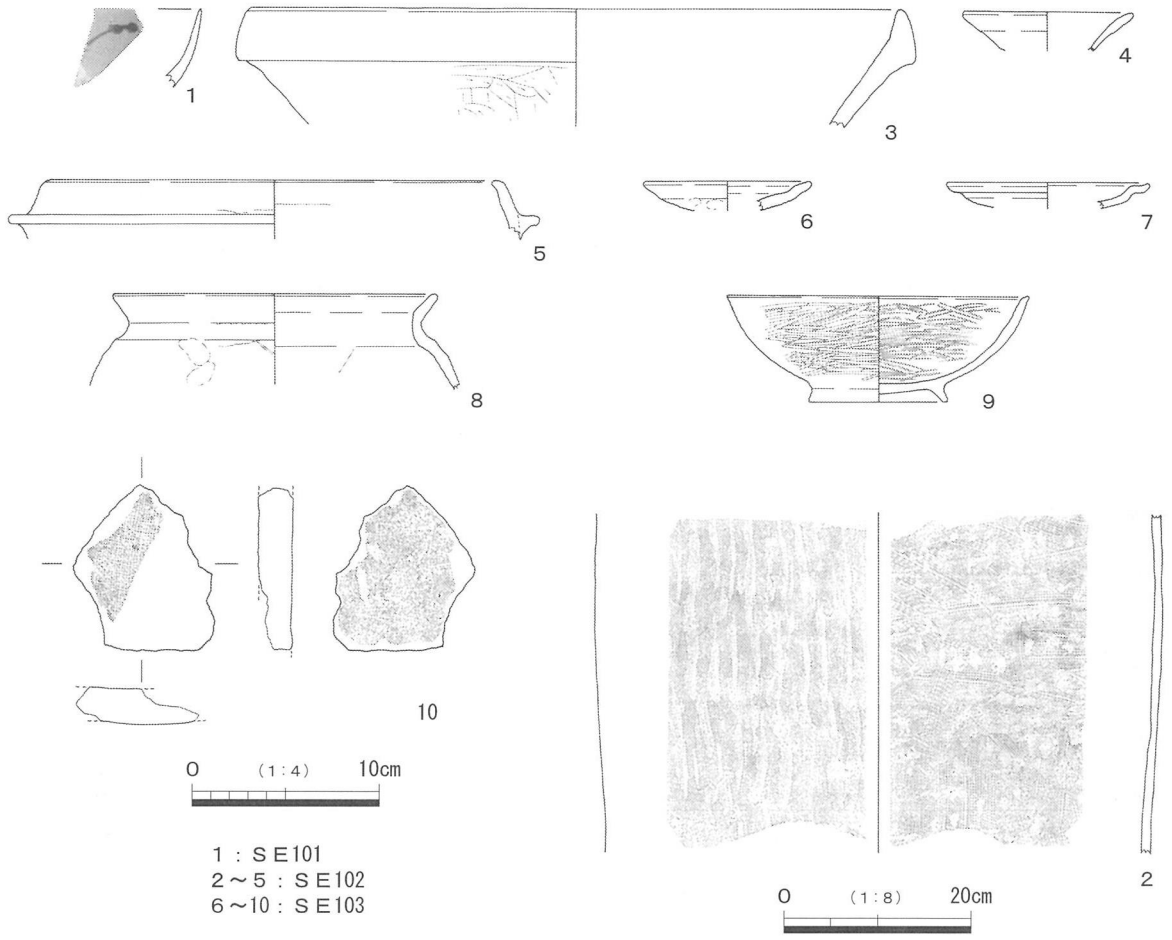
２区の北西部で検出した。平面形状は円形で、径約1.5mを測る素掘りの井戸である。断面形状はＵ字形で、深さ0.9mを測る。埋土は黒褐色細粒砂混粘土・褐色細粒砂混粘土(炭化物含む)・明黄褐色細粒砂混粘土で、11世紀後半の土師器、須恵器、瓦器などの細片が出土した。この内５点（６～10)を図化した。６・７は土師器小皿である。６の底部は平らである。口縁部は屈曲し外反する。７の底部は平らである。口縁部は屈曲し段を有するいわゆる「て」字状口縁である。８は土師器甕である。９は瓦器椀である。体部は内湾し、口縁部はやや外反する。底部には断面Ｕ字形の高台が「ハ」の字に貼付く。内外面ともに横方向を基調とするヘラミガキを密に施す。10は平瓦である。凹面には布目、凸面には縄目の痕跡がある。

ＳＰ101

１区の南西部で検出した。平面形状は円形で、径0.4mを測る。断面形状は逆台形で、中央部では柱痕を確認した。深さ0.22mを測る。埋土は黒色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器などの細片が出土した。


東壁
6.0m
5.0m
0
1
I
IV
a
b
d
c
3
4
II
V
III
SD101
南壁
SP105
遺構A
遺構B
A
SE103
A'
①
②
③
0　盛土・客土
1　10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土
旧耕作土
2　10YR3/3暗褐色細粒砂混粘土
上面は土壌化
3　2.5Y6/2明黄褐色細粒砂混粘土
上面は土壌化
4　10YR7/8黄橙色細粒砂
河川堆積層
SD101　10YR4/6褐色シルト混粘土
SP105　10YR2/1黒色細粒砂混粘土
遺構A・B
5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土
SE101
I　2.5Y4/1黄灰色粗粒砂混粘土
II　10YR4/4褐色細粒砂混粘土
III　2.5Y5/1黄灰色粗粒砂混粘土
IV　10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土
V　5Y4/1灰色粘土
SE103
①　10YR3/1黒褐細粒砂混粘土
②　10YR4/4褐色細粒砂混粘土　炭化物含む
③　10YR6/6明黄褐色細粒砂混粘土
SE102
a　10Y4/1灰色粘土
b　10Y6/1灰色シルト混粘土
c　5Y4/1灰色細粒砂混粘土
d　7.5YR4/1褐灰色粗粒砂混粘土
2区
1区
現代井戸
SD101
SP103
SE102
SE103
A'
A
SP102
SP104
SP101
SD102
SE101
SP105
0　(1:50)　1m

第３図　平・断面図



第４図　出土遺物実測図

ＳＰ102

１・２区で検出した。平面形状は楕円形で、長径0.65ｍ、短径0.45ｍを測る。断面形状は逆台形で、北部では柱痕を確認した。深さ0.2ｍを測る。埋土は黒色細粒砂混粘土で、瓦器、須恵器などの細片が出土した。

ＳＰ103

１区の北部で検出した。北側は現代井戸に切られる。検出した平面形状は円形で、径0.4ｍを測る。断面形状は逆台形で、南東部では柱痕を確認した。深さ0.2ｍを測る。埋土は黒色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器などの細片が出土した。

ＳＰ104

２区の南部で検出した。平面形状は円形で、径0.4ｍを測る。断面形状は逆台形で、北西部では柱痕を確認した。深さは0.15ｍを測る。埋土は上から黒色細粒砂混粘土、灰色シルト混粘土で、土師器、瓦器などの細片が出土した。

ＳＰ105

２区の南部で検出した。遺構の南側は調査区外に至るため形状および規模は不明である。検出した部分の東西幅は0.55ｍで、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒色細粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

ＳＤ101

１区の北部で検出した。遺構の北東側は調査区外に至るため、形状および規模は不明である。検出した部分の南北幅は0.5mで、深さは0.4mを測る。埋土は褐色シルト混粘土で、土師器などの細片が出土した。

ＳＤ102

２区の南部で検出した。平面形状は東西方向に直線に伸び、幅0.2～0.3mを測る。断面形状はＵ字形で、深さ0.1mを測る。埋土は灰色シルト混粘土で、土師器、須恵器などの細片が出土した。

なお、南壁では、２層上面から切り込む遺構（**遺構Ａ・Ｂ**）を確認した。両遺構ともに調査区外に至ることや、遺物の出土はなく、規模や時期などの詳細は不明である。

地層内出土遺物

２層からは土師器、瓦が少量出土した。いずれも細片遺物であるため図化は不可能であった。

３．まとめ

今回の調査では、平安時代後期～末期、鎌倉時代後期～室町時代、近代の遺構を確認した。平安時代後期～末期の遺構は第19次調査（西村1996）でも検出していることから、同時期の居住域が本地周辺に存在していることが判った。また、鎌倉時代後期～室町時代の遺構は萱振2011-324（原田2012）で検出し、近世～幕末の遺構は萱振遺跡第23次調査（岡田2003）で検出しており、これらから、本地付近には、近世末頃までの居住域が広がっていたことが明らかになった。

【参考文献】

・西村公助　1996「Ⅳ　萱振遺跡（第19次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一　2003「Ｘ　萱振遺跡（第23次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2012「Ⅱ－３－７　萱振遺跡（2011-324）」『八尾市内平成23年度発掘調査報告書』　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

図版1

調査地周辺（南東から）

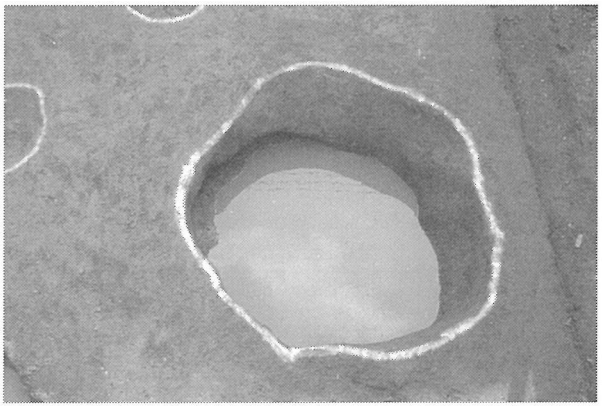
調査状況（北東から）

１・２区南壁（北西から）

１・２区全景（北から）

１区ＳＥ101全景（南から）

１区ＳＥ102全景（西から）



２区ＳＥ103全景（北から）

９

ＳＥ103出土遺物

Ⅲ　郡川遺跡第22次調査（ＫＲ2014－22）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市黒谷二丁目地内で実施した重頭池改修工事に伴う遺構確認調査報告書である。

1．本書で報告する郡川遺跡第22次調査（ＫＲ2014－22）の遺構確認調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財遺構確認調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成27年２月４日（外業実働１日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約10㎡である。

1．現地調査においては、伊藤静江・松田逸朗の参加を得た。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成27年３月に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……15

2．調査概要……16

　1）調査の方法と経過……16

　2）基本層序……16

3．まとめ……17

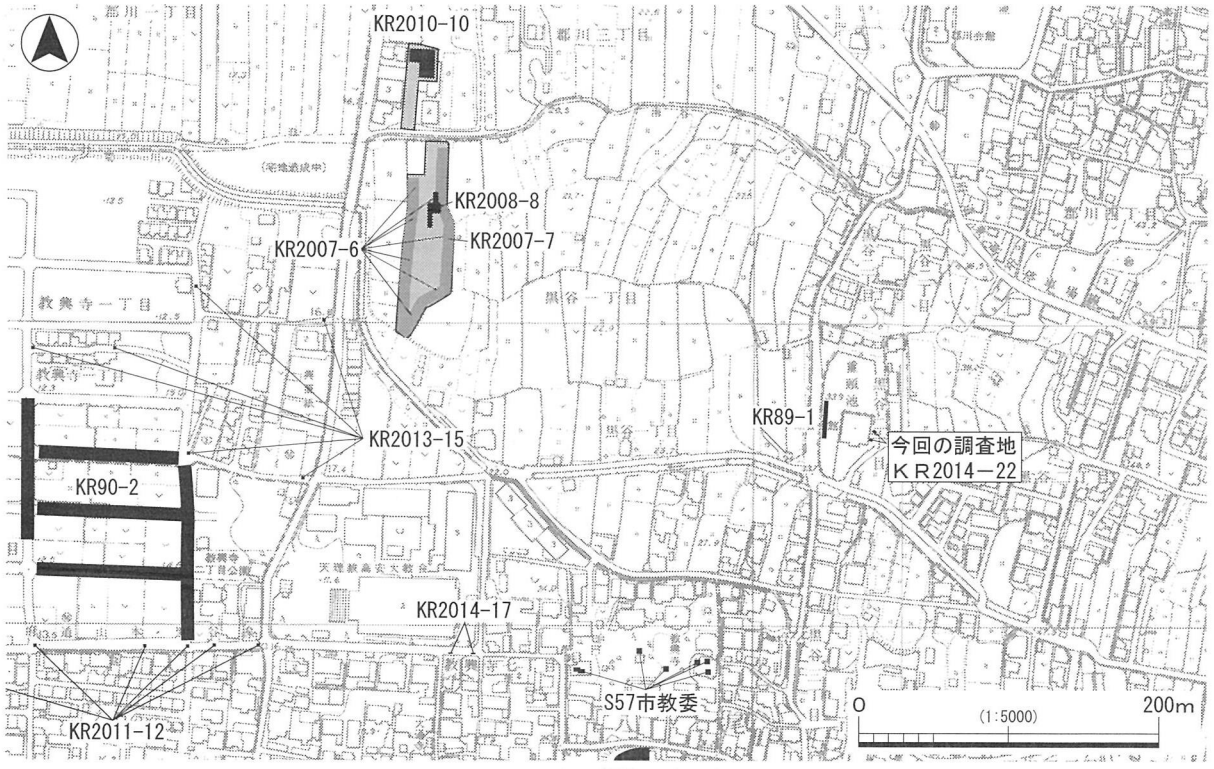
Ⅲ　郡川遺跡第22次調査（ＫＲ2014－22）

１．はじめに

郡川遺跡は八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川一～五丁目・教興寺一～七丁目・黒谷一～五丁目・垣内一～五丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であると認識されている。

今回の調査地である重頭池では、市教委による遺構確認調査(89-399、90-105)や、当研究会による第１次の発掘調査（ＫＲ90－１）が行われている。池の西側堤体築造に伴うＫＲ90－１では、古墳時代中期～後期に比定される溝が検出され、鉄滓・鞴羽口・製塩土器・馬歯といった製鉄関連の遺物の他、韓式系土器も出土しており注目される。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、重頭池改修工事に伴う遺構確認調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第22次調査である。

調査区は２箇所(北から１・２区)で、平面形は東西約2.5m×南北約2.0mの長方形を呈し、面積は約10㎡を測る。

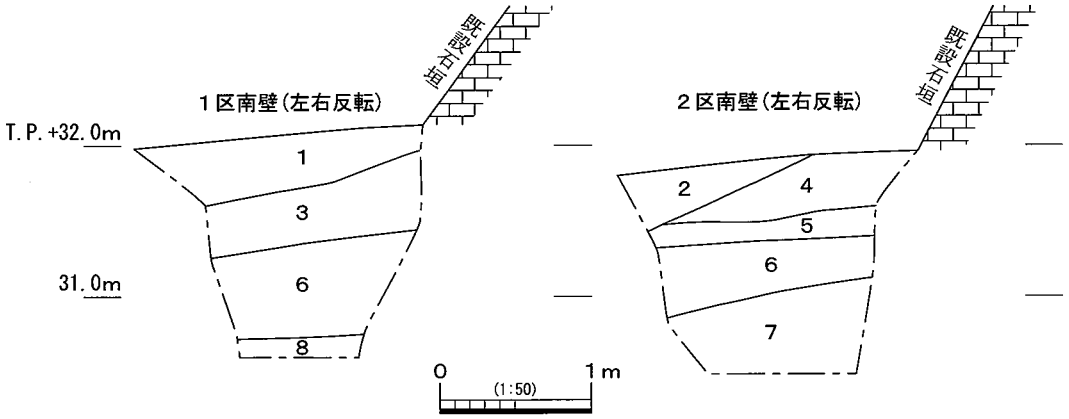
調査は現地表下約1.6mまでについて機械・人力掘削併用により実施した。なお調査は２区から着手した。

調査では、調査地南西部に位置する八尾市街区補助点(3D268：T.P.+34.369m)を標高の基準とした。

２）基本層序

１・２層は池の堆積土で、近年までのガラス瓶や陶磁器等を含む。３層以下は水成層で、３・４・６層は巨礫を含む土石流状の堆積である。１区最下部で見られた８層シルト質粘土は地山と考えられるが、西部で確認されている古墳時代の遺構面に対応する可能性がある。３層以下から遺物は出土していない。

第２図　調査区位置図



１．2.5Y6/4にぶい黄色極細粒砂～中礫　池の堆積土
２．7.5Y2/2オリーブ黒色シルト～細礫　池の堆積土
３．2.5GY4/1暗オリーブ灰色巨礫混粘土～粘土質シルト
４．2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～巨礫
５．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト互層
６．2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂～巨礫
７．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土～シルト互層
８．2.5Y7/6明黄褐色シルト質粘土

第３図　断面図

３．まとめ

今回の調査地では、粘土～シルトの互層や土石流状の砂礫層といった扇状地性堆積が見られた。層相から勘案して当地は谷地形に当っているものと推測される。池の西側堤体築造に伴う郡川遺跡89-399やＫＲ90－１においても、南部では谷状地形が確認されているが、これに繋がる谷と捉えられよう。

【参考文献】
・米田敏幸1990「7.郡川遺跡(89-399)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財調査報告21　平成元年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・渕　斎1991「2.郡川遺跡（90-105）の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財調査報告23』八尾市教育委員会
・原田昌則1997「Ⅱ郡川遺跡（第１次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地遠景（北から）

調査地（北から）

１区機械掘削（南東から）

１区全景（北東から）

１区南壁

２区機械掘削（北東から）

２区全景（北から）

２区南壁

Ⅳ　小阪合遺跡第47次調査（ＫＳ2013－47）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山本町南七丁目地内で実施した、南山本小学校校舎改築に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第47次調査（ＫＳ2013－47）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財遺構確認調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成26年１月６日・７日（現場実働２日）に実施した。調査面積は約15㎡である。

1．現地調査には飯塚直世・市森千恵子・芝﨑和美・村田知子が参加した。

1．本書に係る内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。

　遺物実測－伊藤静江・村田。

　遺物トレース－市森。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……19

2．調査概要……20

　1）調査の方法と経過……20

　2）基本層序……21

　3）検出遺構と出土遺物……21

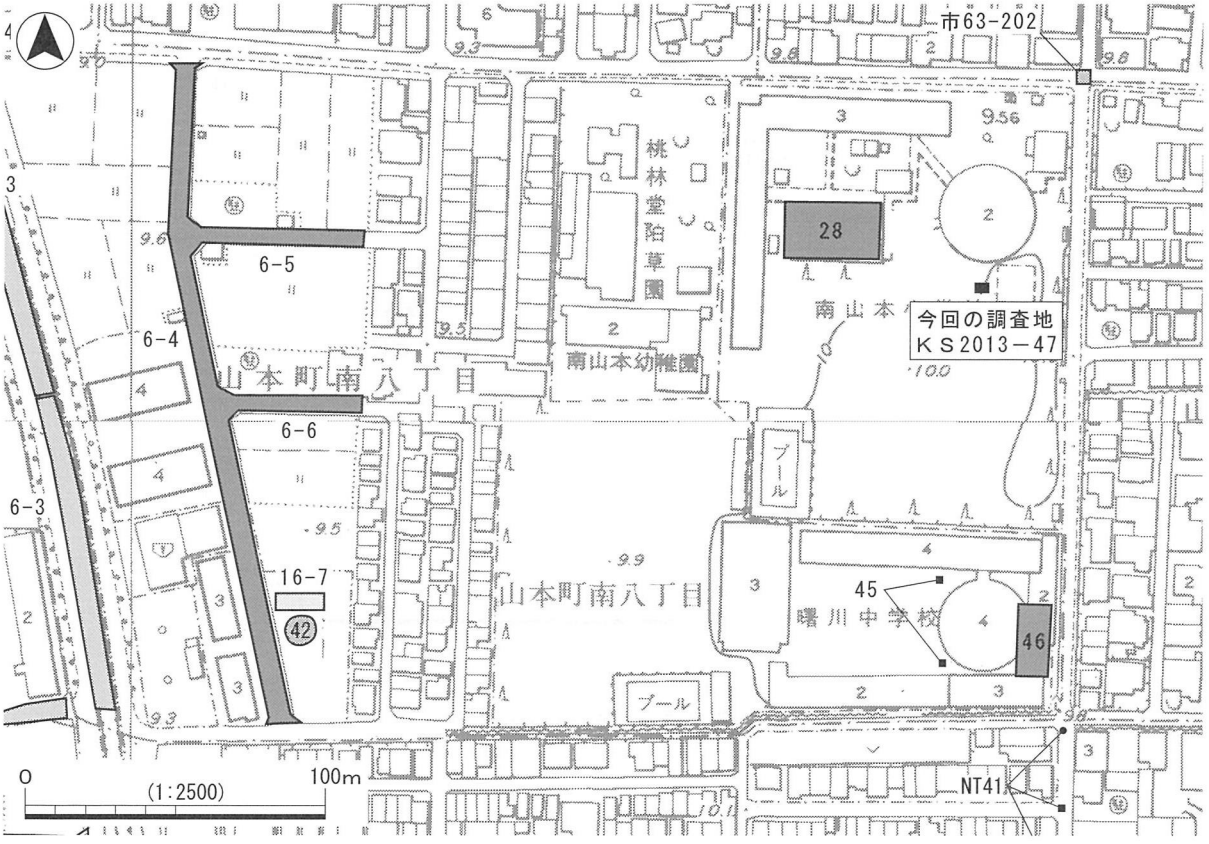
3．まとめ……21

Ⅳ　小阪合遺跡第47次調査（ＫＳ2013－47）

１．はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、若草町、山本町南七・八丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲南東部に当たり、周辺では北部で第28次調査、西部で第６次・第16次・第42次調査を、また南部では第46次調査の他、中田遺跡第31次・36次・第41次調査を当調査研究会が実施している。主な調査成果としては、第28次調査や中田遺跡第36次調査では弥生時代後期の方形周溝墓や土器棺墓からなる墓域が確認されている。また第42次調査の古墳時代初頭の溝から出土した船や鹿を描いた手焙り形土器は、絵画土器研究において重要な資料となっており特筆される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

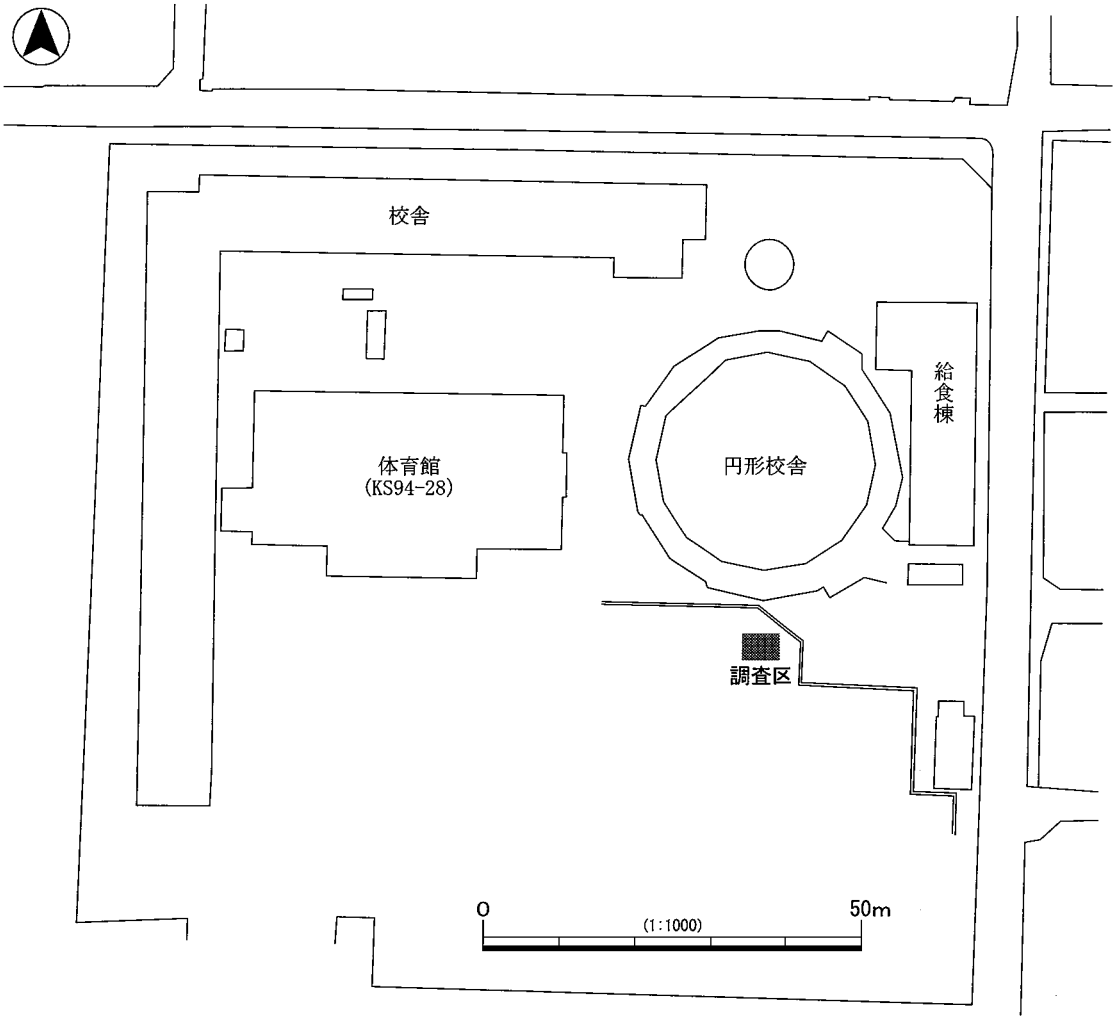
1）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市山本町南七丁目地内の市立南山本小学校校舎改築に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第47次調査である。

調査区平面形は東西約5.0m×南北約3.0mの長方形を呈し、面積は約15㎡を測る。

調査は、現地表下約2.6mまでについて機械・人力掘削併用により実施した。当初は約3.0mまでを確認する予定であったが、下部の砂層からの湧水が著しく壁面崩壊の危険が生じたために途中で断念した。

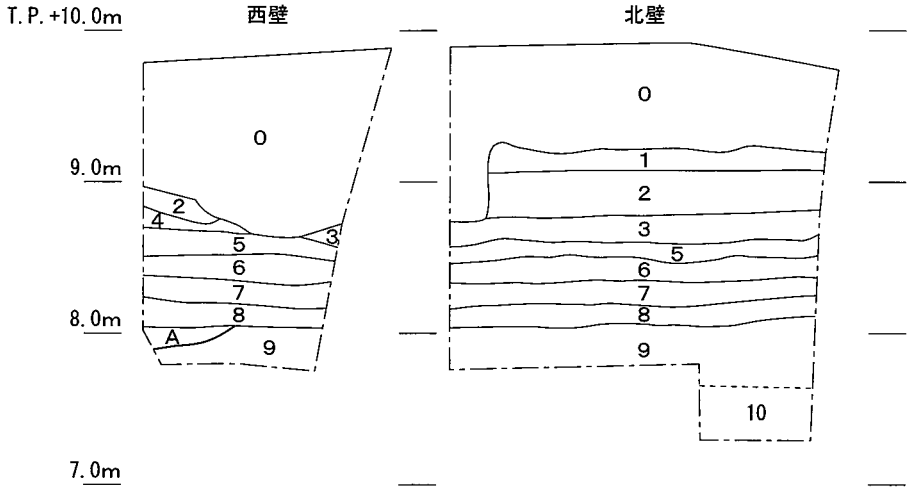
調査では、調査地北東部交差点に位置する八尾市街区多角点(10D65：T.P.+9.730m)を標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

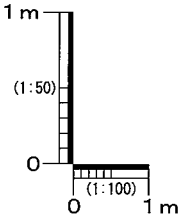
２）基本層序

０層は盛土・撹乱である。１層は旧耕土である。２・３層も撹拌された作土で、時期は近世と考えられる。４層は細粒砂～極粗粒砂からなる水成層で、洪水砂と考えられる。５・６層は撹拌された作土である。５層からは土師器、須恵器片が少量出土した。７層は湿地性の水成層である。８層は暗色を呈する土壌化層で、弥生時代後期頃の遺物包含層である。９層は静水性の水成層で、上部は土壌化する。10層は細粒砂～極粗粒砂からなる水成層で、湧水の激しい河川堆積である。



０．盛土・撹乱
１．7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　旧耕土
２．5Y6/1灰色シルト～極粗粒砂　撹拌作土
３．5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～細礫多混粘土　Fe斑　撹拌作土
４．10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂～極粗粒砂　水成層（洪水砂）
５．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～細礫混粘土　Fe斑　撹拌作土
６．7.5Y6/1灰色極細粒砂～極粗粒砂少混粘土　Fe斑多　撹拌作土
７．10Y6/1灰色粘土　Fe斑　炭酸鉄　水成層
８．10Y3/1オリーブ黒色粘土　土壌化層（弥生後期遺物包含層）
９．5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土　水成層　上部土壌化
10．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂　水成層（河川堆積）

Ａ．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　炭

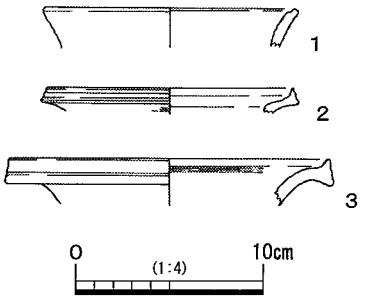


第３図　断面図

３）検出遺構と出土遺物

平面的には捉えられなかったが、西壁南部において９層上面（T.P.+8.1m）から切り込む遺構状の落ち込み（Ａ層）を確認した。Ａ層は西壁において北から南に約15cm落ち込むもので、埋土は炭を含む単層である。遺物等は見られなかったが、８層出土遺物から勘案して遺構の時期については弥生時代後期が考えられる。

地層内出土遺物では１～３を図化した。１は５層出土の土師器甕口縁部である。口縁端部内面に段を成すもので、時期は古



第４図　出土遺物

代頃に比定されよう。２・３は８層出土の弥生土器である。２は甕、３は広口壺で、共に口縁端部外面に凹線を巡らせるもので、生駒西麓産の胎土である。後期前半に比定されよう。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期、古代～中世頃の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱を数える。

弥生時代後期では遺物包含層（８層）の他、断面において遺構も確認した。北西約30ｍの体育館建設時に実施した第28次調査では、方形周溝墓や土器棺墓から構成される弥生時代後期の墓域が検出されている。今回も同時期の遺構・遺物が検出され、集落域が東に広がることが確認された。同調査では古代末～中世の生産関連遺構を確認しているが、本調査の５・６層がこれに相当すると考えられ、該期の生産域が広がることも判明した。

【参考文献】

・河村恵理2008「Ⅰ　小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）」『小阪合遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告116』財団法人八尾市文化財調査研究会

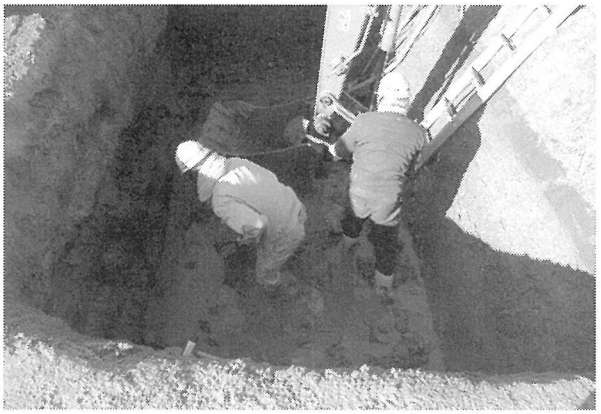
・西村公助2000「Ⅷ　中田遺跡第36次調査（ＮＴ97－36）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一・木村健明2009「Ⅰ　小阪合遺跡第42次調査（ＫＳ2007－42）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会

・原田昌則1996「Ⅵ　中田遺跡第31次調査（ＮＴ95－31）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』財団法人八尾市文化財調査研究会

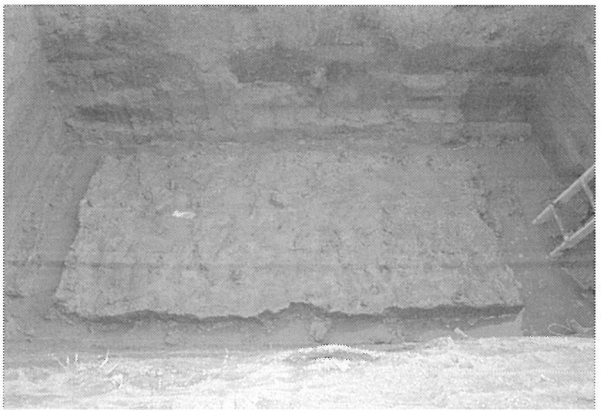
図版1

機械掘削（南東から）



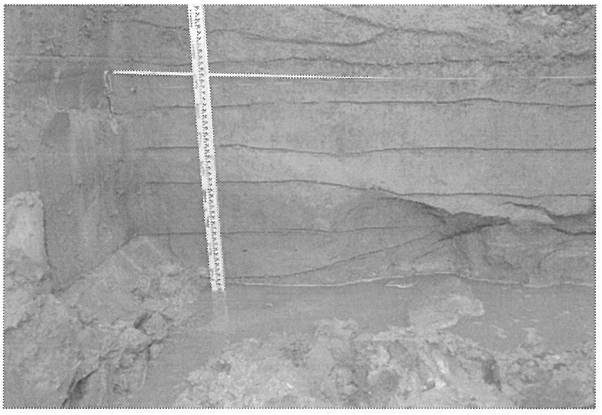
人力掘削状況（東から）

６層上面（北から）



９層上面（北から）

西壁



西壁下部Ａ層

北壁

下層状況（西から）

Ⅴ　田井中遺跡第21次調査（ＴＮ2013－21）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市田井中三丁目地内(志紀小学校)で実施した志紀小学校校舎増築工事に伴う田井中遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

1．本書で報告する田井中遺跡第21次調査(ＴＮ2013－21)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年12月26日(外業実働１日)に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約9.0㎡である。

1．現地調査においては、國津玲子・村田知子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。

　デジタルトレース－樋口

1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……25

2．調査概要……26

　1）調査の方法と経過……26

　2）基本層序……26

　3）検出遺構と出土遺物……28

3．まとめ……28

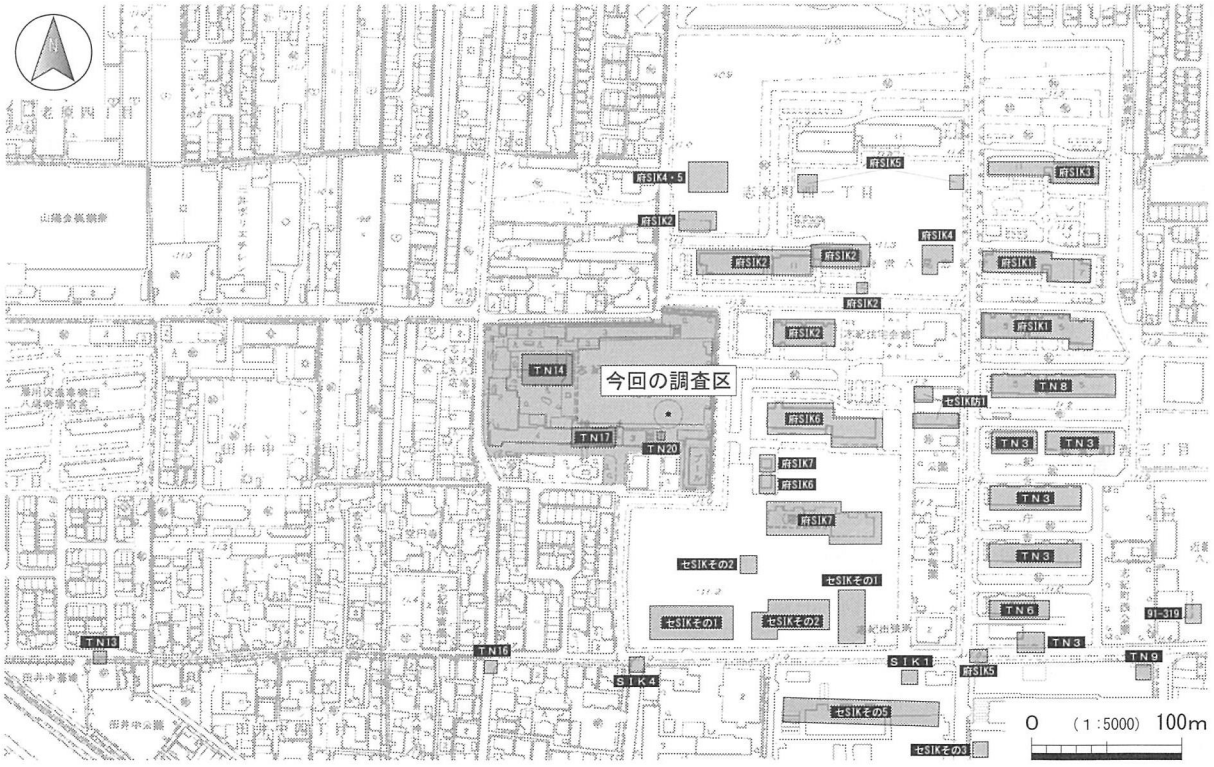
V　田井中遺跡第21次調査（ＴＮ2013－21）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する田井中遺跡は、本市の南部、現在の行政区画では、田井中一～四丁目、志紀町西二丁目、空港一丁目の東西約0.9km、南北約0.9kmがその範囲とされている。地形的には、旧大和川の主流である長瀬川の左岸、平野川の右岸に形成された沖積地上に立地する。現地表面高は、遺跡南東端が最も高くT.P.+12.3m前後、北西端が最も低くT.P.+10.1m前後である。比高差は約2.2mを測り、南東から北西に傾斜する地勢を有する。

田井中遺跡は、1975(昭和50)年に陸上自衛隊八尾駐屯地内で行われた下水道工事の際、弥生土器が出土したことによりその存在が確認された。その後、当研究会による本格的な発掘調査が1982(昭和57)年に実施されたのを端緒に、今日に至るまで、大阪府教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会、(財)大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当研究会による多次に亘る調査が、主として遺跡の南西～南部において行われてきた。その結果、縄文時代晩期以降の複合遺跡として周知されるようになった。特に、遺跡の南西部(駐屯地西部)では、弥生時代前～中期の居住域や墓域を構成した遺構群をはじめ、これらに伴う遺物が多量に出土しており、当該期の集落の中心がこの付近に存在したことを示唆する成果として特筆される。

本遺跡の周辺には類似した地形環境が形成されており、数多くの遺跡が密集している。北には



第１図　調査地周辺図

老原遺跡や奈良時代の瓦が出土した五条宮跡が位置するほか、北東には、弥生時代前期以降、水田耕作を中心とした生産関連遺構を連綿と検出した志紀遺跡が接している。特に弥生時代中期初頭～古墳時代前期にかけては、広義において居住域の田井中遺跡、生産域の志紀遺跡として、密接に関わりながら遺跡が形成されているものと考えられている。一方東には、長瀬川を挟んで弓削遺跡や東弓削遺跡が対峙している。この内弓削遺跡では、弥生時代後期の遺物が多量に出土した大溝をはじめ、東部瀬戸内地域からの搬入品を含む多量の土器が出土した井戸や溝を検出しており、柏原市本郷遺跡とともに、当該期の大規模な居住域を形成していた可能性が高くなった。また、古墳時代後期の埴輪も出土しており、当地付近には埋没古墳が存在する可能性が高い。東弓削遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭の居住域に伴う遺構、遺物を検出したほか、古墳時代中～後期に埴輪も出土しており、弓削遺跡同様、埋没古墳の存在を垣間見る成果を得た。さらに、奈良～平安時代に比定される瓦も出土しており、古代寺院の存在を示唆する成果として注目される。南～西にかけては木の本遺跡が展開している。当遺跡は、遺跡の西部に位置する南木の本三丁目付近を中心に、弥生時代中期前半、古墳時代初頭前半～後半、古墳時代前期前半、古墳時代中期、平安時代後期の居住域に伴う遺構、遺物が重層的に検出された。また、田井中遺跡に近い空港一丁目付近を中心とする木の本遺跡東部では、弥生時代前期の居住域や墓域に伴う、遺構、遺物が確認されている。しかし、これ以後は、古墳時代前期の墓域に関連する可能性が高い遺構、遺物が検出されたのみであり、相対的に遺跡の密度は希薄と言えよう。中世以降は、志紀遺跡同様、生産域として利用されていた可能性が高い。

２．調査概要

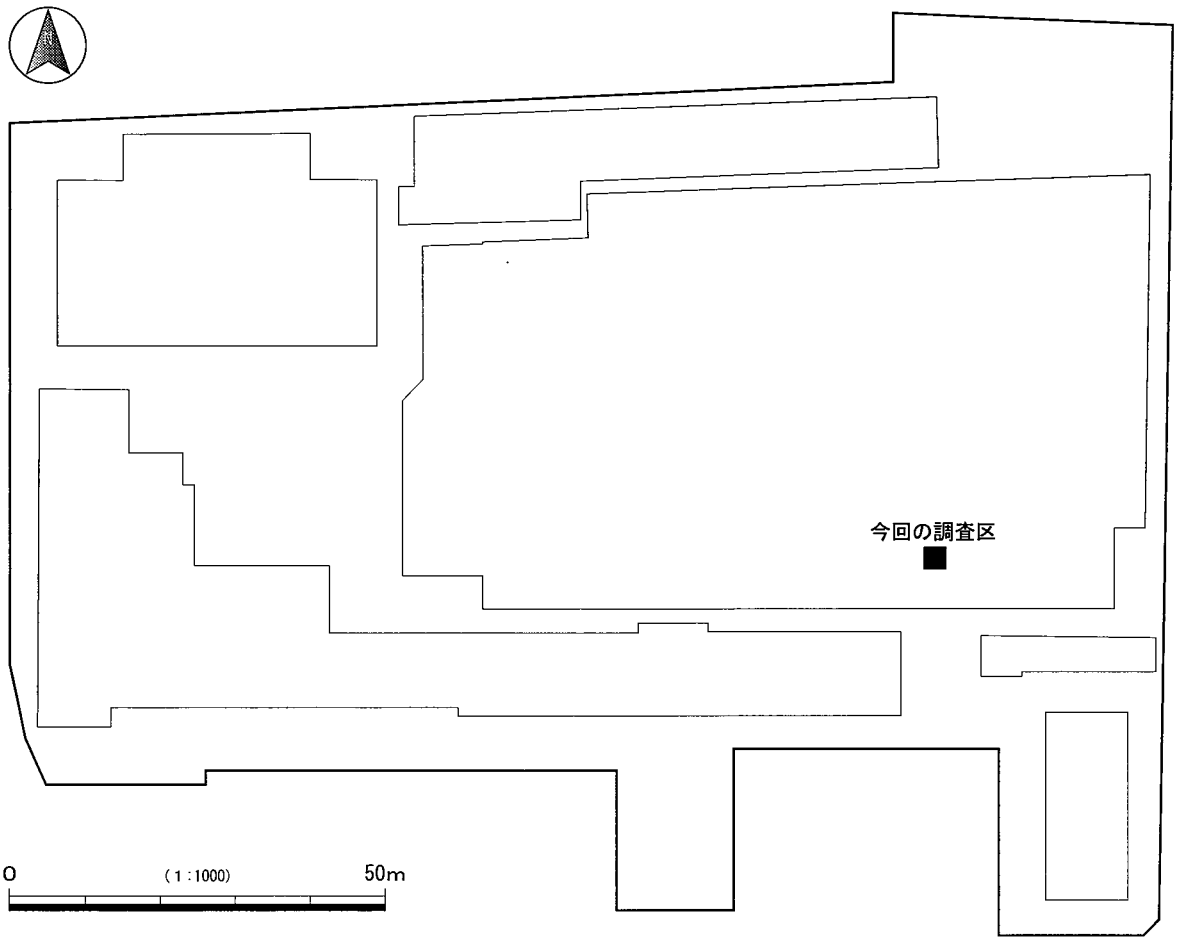
１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は、志紀小学校校舎増築工事に伴うもので、当研究会が田井中遺跡で実施した第21次調査にあたる。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表(T.P.+11.3m前後)下3.0m前後までを重機と人力を併用して掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は１ヶ所(東西長約3.0m、南北長約3.0mの正方形)で、面積は約9.0㎡を測る。調査で使用した標高の基準は、八尾市街区補助点4C128(調査地北東Ｔ字交差点：T.P.+11.850m)である。

調査の結果、現地表下0.65mにおいて旧作土層が存在するほか、その下位にも作土層が複数層存在すること確認した。また、これより下位には、河川堆積層や湿地性堆積層が互層を成して厚く堆積する様相が確認された。

２）基本層序

現地表(T.P.+11.3m)下0.65m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土層(０層)である。以下現地表3.0m前後までの2.35m間において13層の基本層序を確認した。１層は旧作土層(T.P.+10.6～10.7m)である。２～５層は作土層(２層：T.P.+10.5～10.6m　３層：T.P.+10.5m　４層：T.P.+10.4m　５層：T.P.+10.3m)である。６・７層は河川堆積層(６層：T.P.+10.1m　７層：T.P.+9.9m)である。８・９層は湿地性堆積層(８層：T.P.+9.7m　９層：T.P.+9.5m)である。10層は河川堆積層(T.P.+9.3)である。11層(T.P.+8.9m)は作土層の可能性がある。12・13層は湿地性堆積層(12層：T.P.+8.8m　層：T.P.+8.6m以下)である。



第２図　調査区位置図

０層：現代の整地に伴う客土・盛土層

１層：暗灰色(N3/)粘土質シルト

旧作土層(T.P.+10.6～10.7m)である。層厚は10～20cmを測る。グライ化の極めて顕著な撹拌層である。

２層：オリーブ色(2.5Y5/1)粘土質シルト

グライ化の進行した作土層(T.P.+10.5～10.6m)である。層厚は10～20cm。

３層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト

作土層(T.P.+10.5m)である。層厚は10cmを測る。グライ化の顕著な撹拌層であるが、部分的に雲状酸化鉄分の沈着を認める。

４層：にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト

作土層(T.P.+10.4m)である。層厚は約10cmを測る。撹拌層、３層同様、部分的に雲状酸化鉄分の沈着を確認した。

５層：灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質シルト～シルト

作土層(T.P.+10.3m)である。層厚は20cm前後を測る。

６層：明黄褐色(10YR7/6)～青灰色(5BG6/1)シルト～細粒砂
砂質優勢の河川堆積層(T.P.+10.1m)である。層厚は20～30cmである。

７層：灰色(N5/)粘土質シルト～シルト
シルト優勢の河川堆積層(T.P.+9.9m)である。層厚は20cmを測る。

８層：灰色(N4/)粘土質シルト～シルト
湿地性堆積層(T.P.+9.7m)である。層厚は20cm前後を測る。

９層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土質シルト～シルト
湿地性堆積層(T.P.+9.5m)である。層厚は20cm。

10層：灰色(N6/)シルト～粗粒砂
ラミナ構造が発達した河川堆積層(T.P.+8.4m)である。層厚は30cmを測る。

11層：黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト～シルト
作土層の可能性がある地層(T.P.+8.9)である。層厚は10cmである。

12層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土～粘土質シルト
湿地性堆積層(T.P.+8.8m)である。植物遺体や炭酸カルシウム塊を多く含む地層である。閉塞した環境下で形成された泥状の堆積層である。層厚は40cmを測る。

13層：緑灰色(10G5/1)シルト質粘土
湿地性堆積層(T.P.+8.6m以下)である。夾雑物を含まないきれいな地層である。グライ化が顕著である。

３）検出遺構と出土遺物

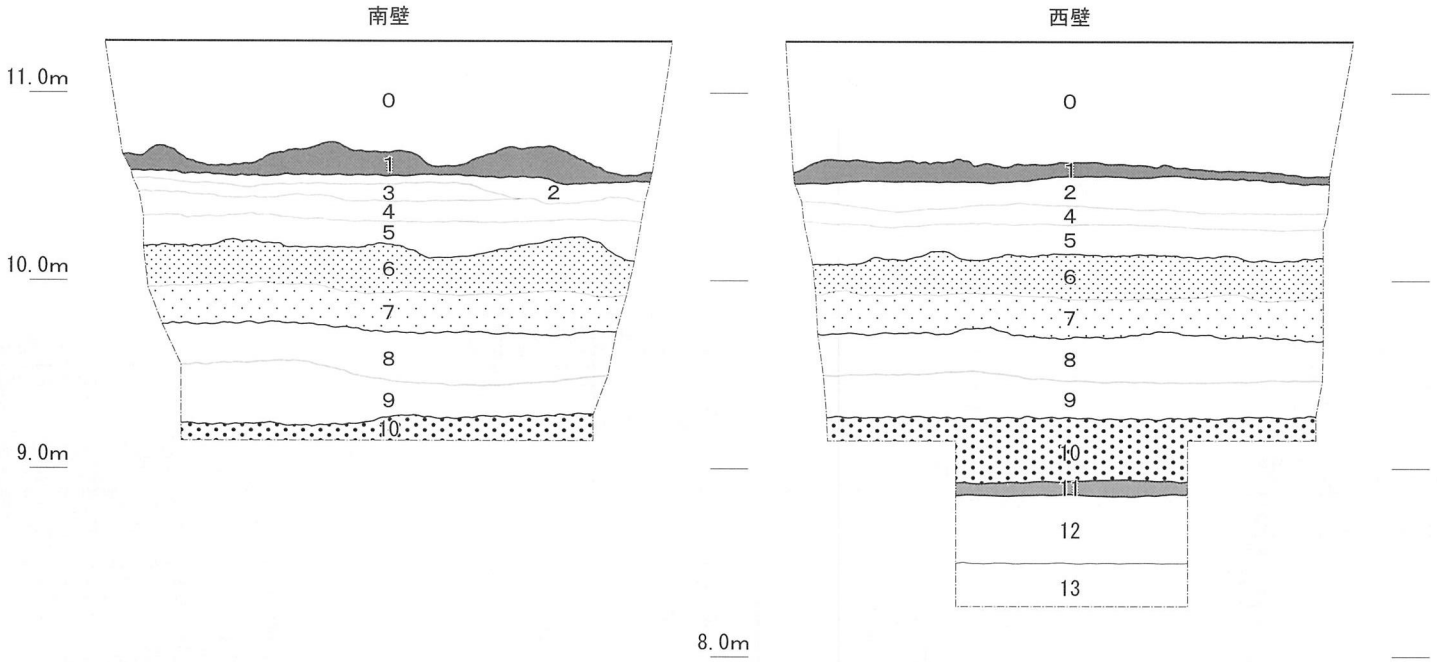
なし。

３．まとめ

本地の南に隣接する地点では第 20 次調査が行われており、現地表下 2.2m前後(T.P.+9.0m前後)において、古墳時代中期に比定される作土層が存在することを確認した。今回の調査における 11 層は、検出レベルや層準から勘案すると、その対応層の可能性が高い。地層の胎土分析等を行っていないため、詳細は不明であるが、古墳時代中期の本地周辺の土地利用を推測する上で、鍵を握る地層と言えよう。

【参考文献】

・岡田清一2006「Ⅰ　田井中遺跡(第20次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告93』財団法人八尾市文化財調査研究会



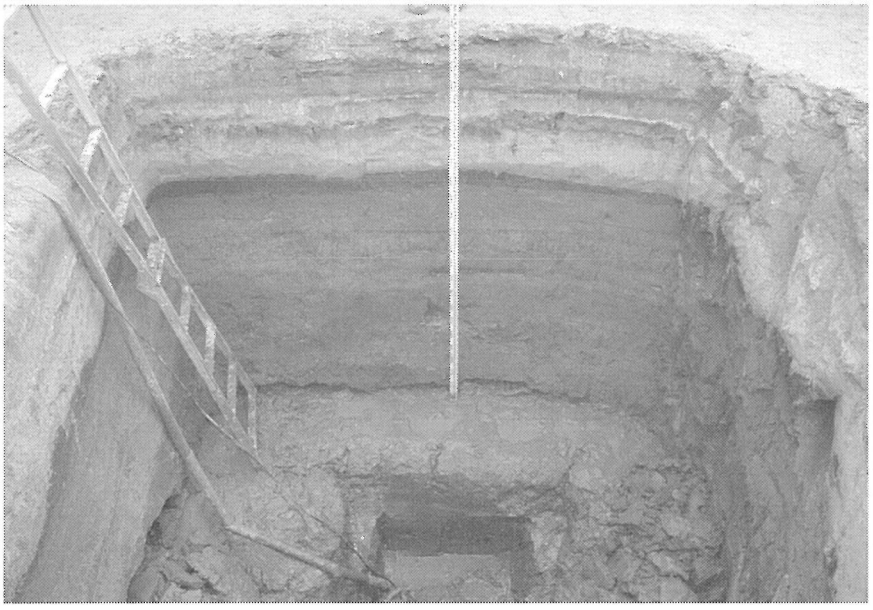
０：客土・盛土層
１：暗灰色(N3/)粘土質シルト(旧作土層)
２：オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土質シルト(作土層)
３：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(作土層)
４：にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト(作土層)
５：灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質シルト～シルト(作土層)
６：明黄褐色(10YR7/6)～青灰色(5BG6/1)シルト～細粒砂(河川堆積層)
７：灰色(N5/)粘土質シルト～シルト(河川堆積層)
８：灰色(N4/)粘土質シルト～シルト(湿地性堆積層)
９：灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土質シルト～シルト(湿地性堆積層)
10：灰色(N6/)シルト～粗粒砂(河川堆積層)
11：黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト～シルト(作土層)
12：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土～粘土質シルト(湿地性堆積層)
13：緑灰色(10G5/1)シルト質粘土(湿地性堆積層)

第３図　断面図(Ｓ＝１/40)

図版1

調査地周辺状況（北東から）

南・西壁断面（０～10層　北東から）



西壁断面（０～13層　東から）

Ⅵ　水越遺跡第17次調査（ＭＫ2014－17）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越二丁目、大字大窪地内で実施した７次第70号配水管整備工事に伴う水越遺跡埋蔵文化財発掘調査である。

1．本書で報告する水越遺跡第17次調査（ＭＫ2014－17）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成26年10月２日～平成27年１月14日（外業実働８日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約32㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・小野聡美・芝﨑和美・國津玲子・右松浩子・松田逸朗の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。
　トレース－西村。

1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……31
2．調査概要……32
　1）調査の方法と経過……32
　2）基本層序……32
　3）検出遺構と出土遺物……32
3．まとめ……33

Ⅵ　水越遺跡第17次調査(ＭＫ2014－17)

１．はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では、大正９年に清原得巖氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。昭和53年には最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。特筆すべき成果として、遺跡範囲北部に当たる研究会第２次調査(MK89-2)では、南北方向に伸びる弥生時代中期の大溝が検出され、環濠集落の存在が推定されている。

今回の調査地の１区は第２次調査の北西約100ｍ、２区は南西約200ｍに所在し、いずれも東高野街道上に位置する。

第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、７次第70号配水管整備工事に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第17次調査(ＭＫ2014－17)である。

調査区は発進立坑(１区)、到達立坑(２区)の２箇所である。１区の平面形状は、南北に長い楕円形で東西幅約3.0、南北幅約7.4mを測り面積は22.2㎡である。２区の平面形状は、円形で直径約3.5mを測り面積は9.6㎡である。調査は、１区が現地表(T.P.+14.8m)下約3.4m、２区が現地表(T.P.+15.4m)下約4.0mについて、人力・機械掘削を併用して実施した。調査で使用した標高は八尾市街区補助点3A484(１区の西部：T.P.+14.933m)である。

２）基本層序

１区の現地表下0.9mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(０層)である。以下現地表下3.4m前後までの2.5m間において７層の基本層序を確認した。１～６層は扇状地性堆積層(１層：T.P.+13.9m　２層：T.P.+13.8m　３層:T.P.+13.6m　４層:T.P.+13.4m　５層：T.P.+13.2m　６層:T.P.+12.9m)である。７層は湿地性堆積層(T.P.+7.9～8.1m)である。

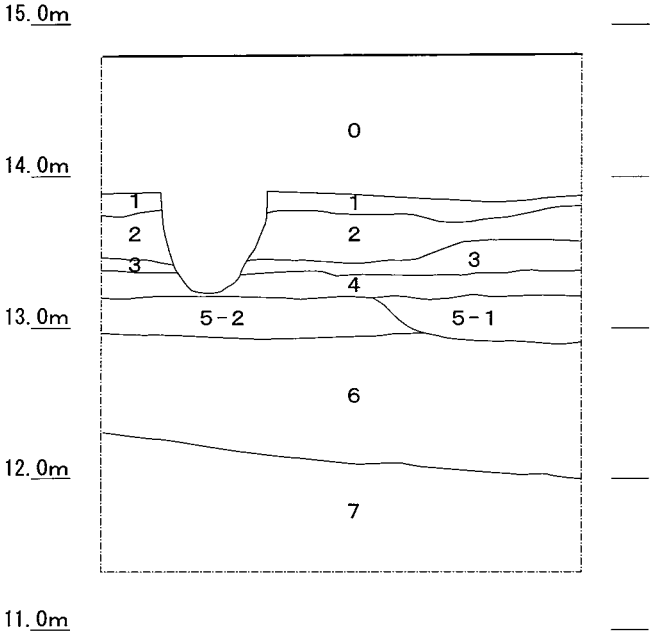
２区の現地表下1.3mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(０層)である。以下現地表下4.0m前後までの2.7m間において６層の基本層序を確認した。１層は旧作土層(T.P.+14.1m)である。２～６層は扇状地性堆積層(２層:T.P.+13.8m　３層:T.P.+13.7m　４層:T.P.+12.5～13.6m　５層:T.P.+13.2m　６層：T.P.+11.5～11.8m)である。

３）検出遺構と出土遺物

１・２区ともに遺構の検出及び遺物の出土はなかった。

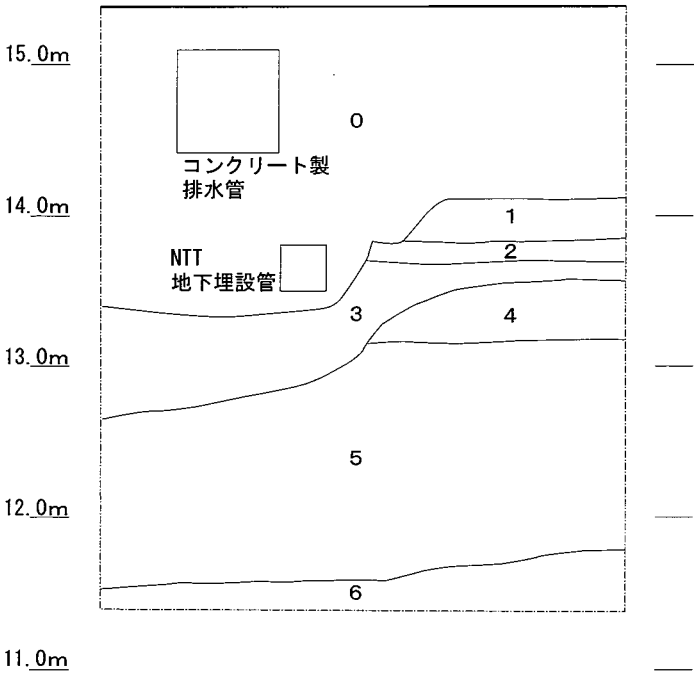
第２図　調査区位置図

１区北壁



０：客土・盛土層
１：2.5Y3/1黒褐色シルト～細粒砂（扇状地性堆積層）
２：2.5Y3/2黒褐色粗～細粒砂（扇状地性堆積層）
３：10YR2/1黒色細礫混粗粒砂（扇状地性堆積層）
４：10YR6/1褐灰色粗粒砂（扇状地性堆積層）
５－１：10YR4/1褐灰色シルト～細粒砂（扇状地性堆積層）
５－２：10YR5/6黄褐色礫混粗粒砂（扇状地性堆積層）
６：10BG5/1青灰色礫混細～粗粒砂（扇状地性堆積層）
７：10YR2/1黒色粘土質シルト（湿地性堆積層）

２区北壁



０：客土・盛土層
１：5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土（旧作土層）
２：10YR5/6黄褐色シルト（扇状地性堆積層）
３：10YR4/6褐色礫混粗粒砂（扇状地性堆積層）
４：10YR4/4褐色粘土質シルト（扇状地性堆積層）
５：5B4/1暗青灰色シルト（扇状地性堆積層）
６：10Y5/1灰色細～粗粒砂（扇状地性堆積層）

0　（1:50）　1m

第３図　壁面図

３．まとめ

今回の調査地では、１・２区ともに扇状地性堆積層を確認し、両調査区ともに谷地形に位置したことが判明した。

調査地周辺では、１区の南東約100ｍに位置する水越遺跡第２次調査（西村1997）、２区の北約100ｍに位置する昭和57年度市教委調査（西村1983）、２区の北東約150ｍに位置する水越遺跡（2006-164）の調査（西村2007）が実施され、弥生時代中期などの遺構や遺物を確認し、居住域の存在が明らかになっている。本地では遺構および遺物は皆無であり、当該期の居住域は１・２区間に発達した尾根上に展開している可能性が高くなった。

【参考文献】

・西村公助 1983「第２章　水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和 56・57 年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告３　財団法人八尾市文化財調査研究会

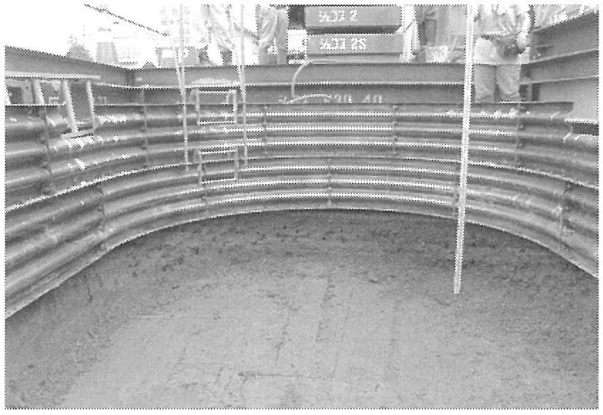
・西村公助 1997「Ｖ　水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・西村公助 2007「２-22　水越遺跡（2006-165）の調査」『八尾市内遺跡平成 18 年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 55　平成 18 年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

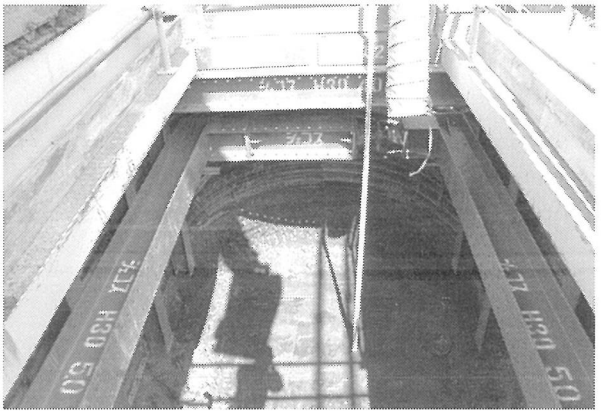
図版1

１区調査地周辺（北から）

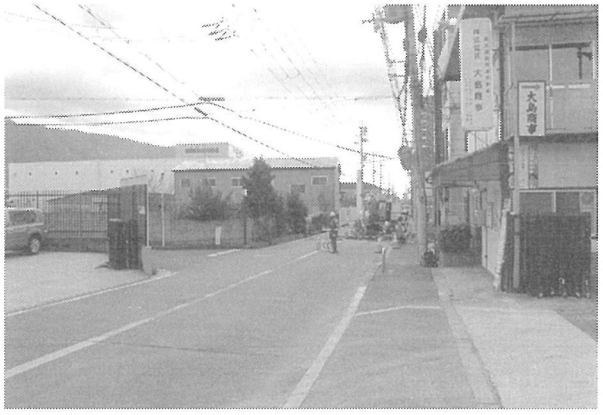
１区北壁０～３層（南東から）



１区北壁３～５層（南から）

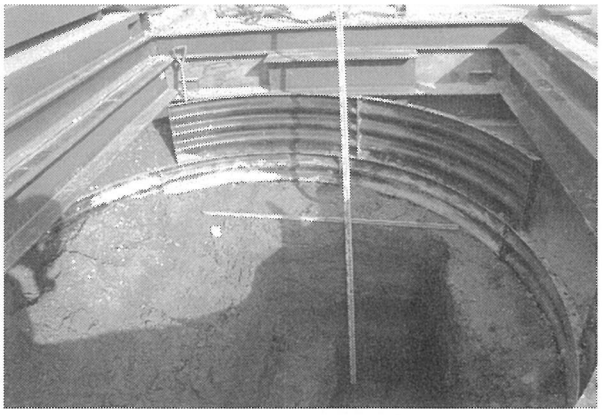


１区北壁６・７層（南から）

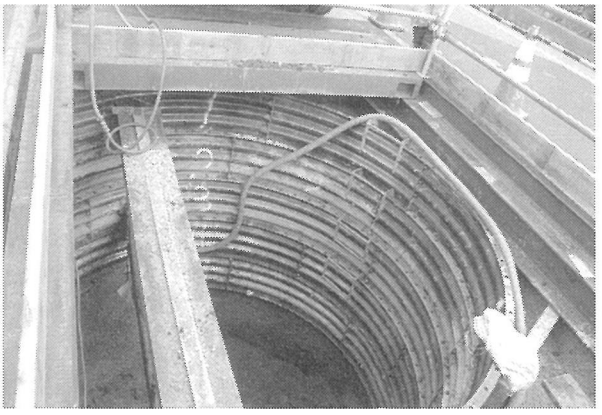


２区調査地周辺（北から）

２区北壁０～１層（南から）



２区北壁１～５層（南から）



２区北壁５・６層（南から）

Ⅶ　八尾南遺跡第37次調査（ＹＳ2012－37）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目１番５で実施した地中埋設物調査（大正住宅二期工区余剰地敷地調査）に伴う埋蔵文化財遺構確認調査である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第37次調査（ＹＳ2012－37）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年11月20・21日（外業実働２日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約43.75㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・伊藤静江・竹田貴子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。
　トレースー西村。

1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……37
2．調査概要……38
　1）調査の方法と経過……38
　2）基本層序……38
　3）検出遺構と出土遺物……38
3．まとめ……40

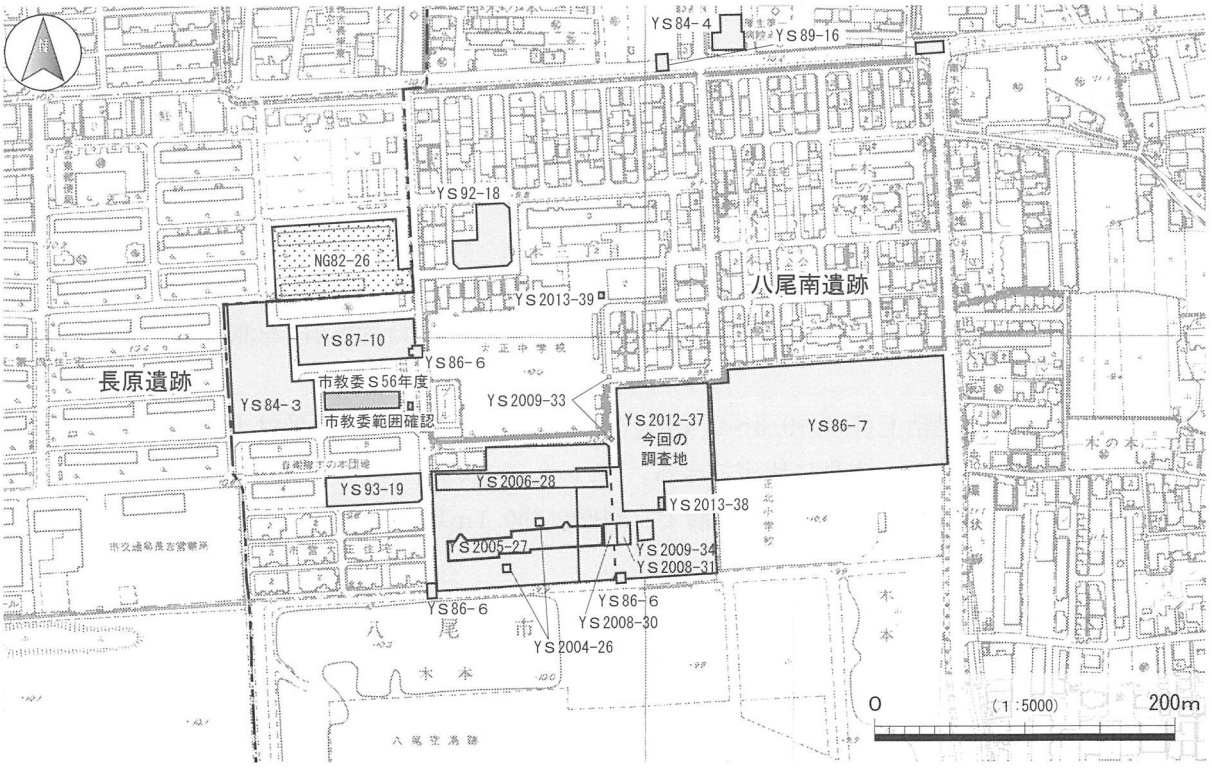
Ⅶ　八尾南遺跡第37次調査（ＹＳ2012－37）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する八尾南遺跡は、本市の南西部、現在の行政区画では、西木の本一～四丁目、若林町一～三丁目の東西約0.5㎞、南北約1.3㎞がその範囲とされている。地形的には、遺跡の大部分を旧大和川水系により形成された沖積平野が占めるほか、南端部には羽曳野丘陵から派生した河内台地が、西端部には河内台地からさらに連なる上町台地が展開している。現地表面高は、遺跡南端部が最も高くT.P.+12.0m前後、北端部が最も低くT.P.+10.0m前後である。比高差は約2.0mを測り、南から北に傾斜する。

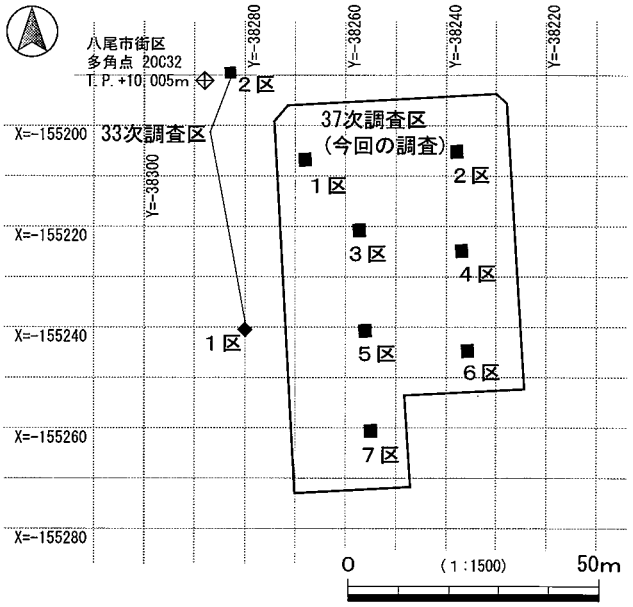
八尾南遺跡は、1973(昭和48)年の地下鉄八尾南駅建設工事により発見された遺跡である。これを受けて行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査では、弥生～古墳時代の居住域や墓域に伴う遺構、遺物が多数検出された。その後、大阪府教育委員会をはじめ、(財)大阪府文化財センター、八尾市教育委員会、当調査研究会により断続的に調査が行われ、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡として認識されるようになった。

本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が密集している。北東部～南東部には弥生時代～中世の複合遺跡である木の本遺跡や太田遺跡が存在するほか、北部～西部には旧石器時代～中世の複合遺跡で、本遺跡と各時代を通じて連続性が認められる長原遺跡が隣接している。



第１図　調査地周辺図

今回の調査地の周辺では、北西約150mの第18次調査地で古墳時代中期の居住域を確認しており、同時期の韓式系土器が多数出土している(原田2008)。また、東約50mの第７次調査では、古墳時代前期、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代初頭にかけての生産域(西村1993)の存在が明らかになっている。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、地中埋設物調査に伴うもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第37次調査である。

調査は、平面規模約2.5×2.5m、面積6.25㎡７ヶ所(北西から１～７区　総面積43.75㎡)について、現地表下1.0m前後の範囲を機械と人力を併用し行った。

地区割については調査地西側で当研究会が行った八尾南第 27 次調査で使用した地区割を北東部に延長する方法を取った。座標は国土座標第Ⅵ系(新座標：世界測地系)を使用し、標高はT.P.値【八尾市街区多角点 20C32(北西側：T.P.+10.005m)】を使用した。

２）基本層序

０層　盛土・客土。層厚は約0.5～0.7mを測る。

１層　暗青灰色細粒砂混粘土(T.P.+9.6～9.7m)。旧耕作土。層厚は約0.1～0.2mを測る。近代以降に比定できる。

２層　褐灰色細粒砂混粘土(T.P.+9.5～9.6m)。作土層で、上面は撹拌を受け土壌化している。層内からは近世の土師器、瓦の細片が極少量出土した。層厚は約0.2mを測る。近世に比定できる。

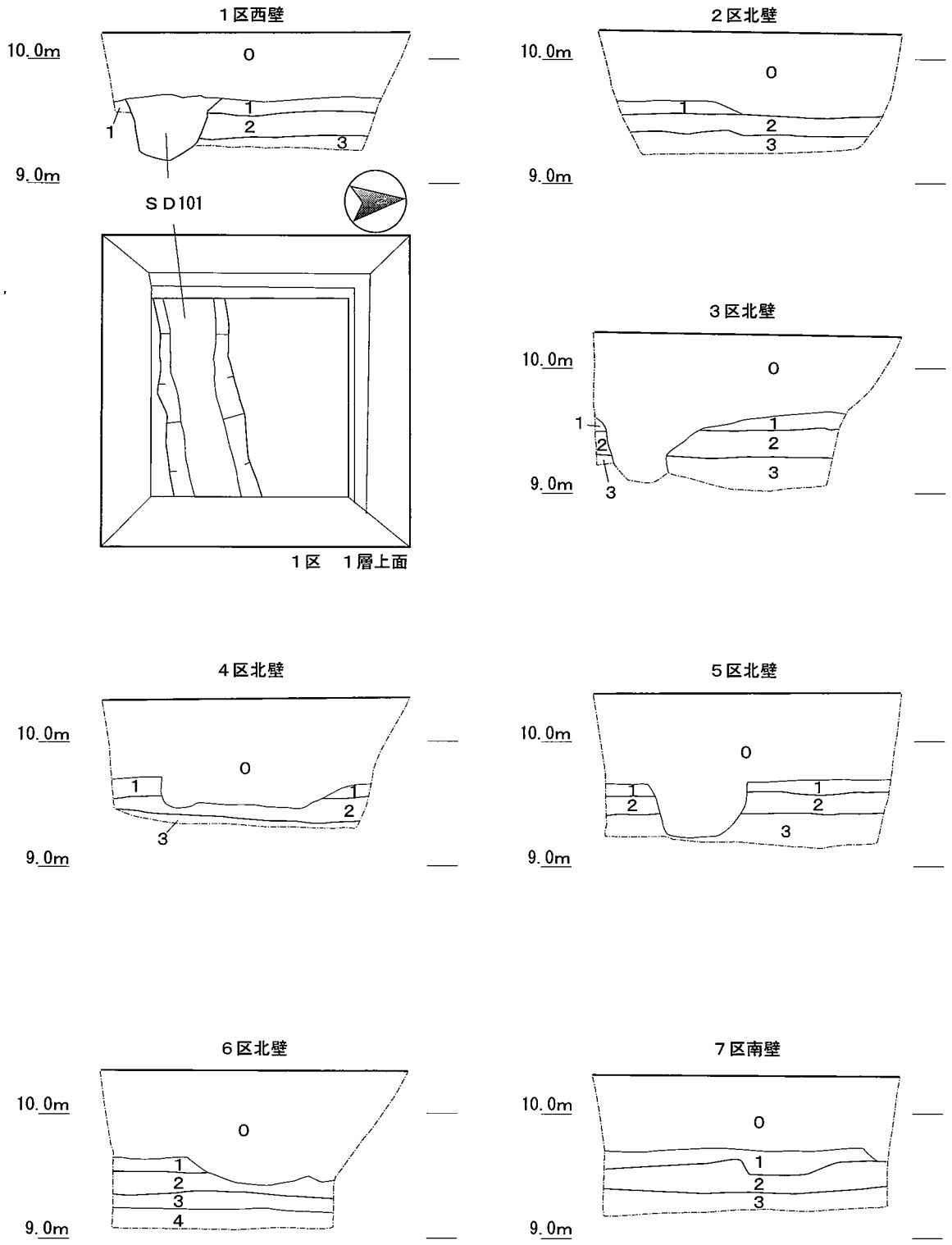
３層　青灰色シルト混粘土(T.P.+9.3～9.4m)。作土層で、上面は撹拌を受け土壌化している。層厚は約0.1mを測る。中世に比定できる。

４層　灰色細砂(T.P.+9.2m)。河川堆積層で、層厚は約0.1m以上を測る。

３）検出遺構と出土遺物

１区の１層上面からは近代以降の溝１条(ＳＤ101)を検出した。

ＳＤ101は、東西方向に伸び、幅0.7m、深さ0.5mを測る。埋土は褐灰色粗粒砂混粘土(黒色粘土のブロック混入)で、ガラスやスレートの細片が出土した。



0　盛土
1　暗青灰色細砂混粘土（旧作土層）
2　褐灰色細砂混粘土（作土層）上面撹拌を受け土壌化
3　青灰色シルト混粘土（作土層）上面撹拌を受け土壌化
4　灰色細砂（河川堆積層）

ＳＤ101　褐灰色粗粒砂混粘土（黒色粘土のブロック混入）

0　（1:50）　1m

第３図　平・断面図

３．まとめ

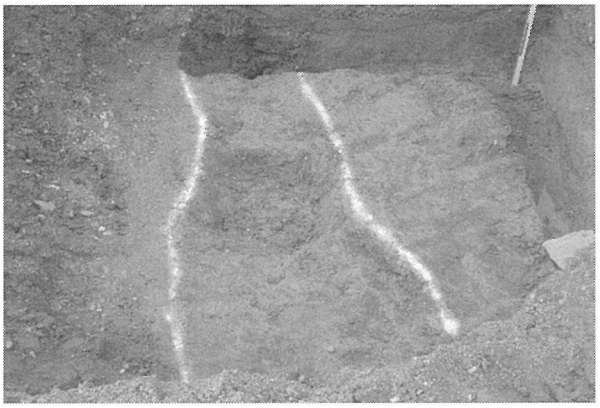
今回の調査では、中世・近世・近代の作土層を確認した。これらの作土層は、第７次(西村1993)や第33次調査(西村2009)でも検出していることから、調査地一帯には生産域が広がっていたことが明らかになった。

【参考文献】

・西村公助1993「Ⅵ　八尾南遺跡第７次調査(YS86-７)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2008『八尾南遺跡第18次発掘調査報告書』―大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う―(財)八尾市文化財調査研究会報告117(財)八尾市文化財調査研究会
・西村公助2010「Ⅲ　八尾南遺跡第33次調査(YS2009-33)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告131』(財)八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地周辺（北東から）



１区　ＳＤ101（東から）

２区　３層上面全景（南から）

３区　３層上面全景（南から）

４区　３層上面全景（南から）

５区　３層上面全景（南から）

６区　３層上面全景（南から）

７区　３層上面全景（北から）

Ⅷ　八尾南遺跡第39次調査（ＹＳ2013－39）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市西木の本三丁目83番、123番及び西木の本四丁目１番２で実施した大正中学校校舎改築に伴う埋蔵文化財遺構確認調査である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第39次調査（ＹＳ2013－39）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年12月26・27日（外業実働２日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約９㎡である。

1．現地調査においては、芝﨑和美・村井俊子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年３月をもって終了した。
　トレースー西村。

1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……43
2．調査概要……44
　1）調査の方法と経過……44
　2）基本層序……44
　3）検出遺構と出土遺物……46
3．まとめ……46

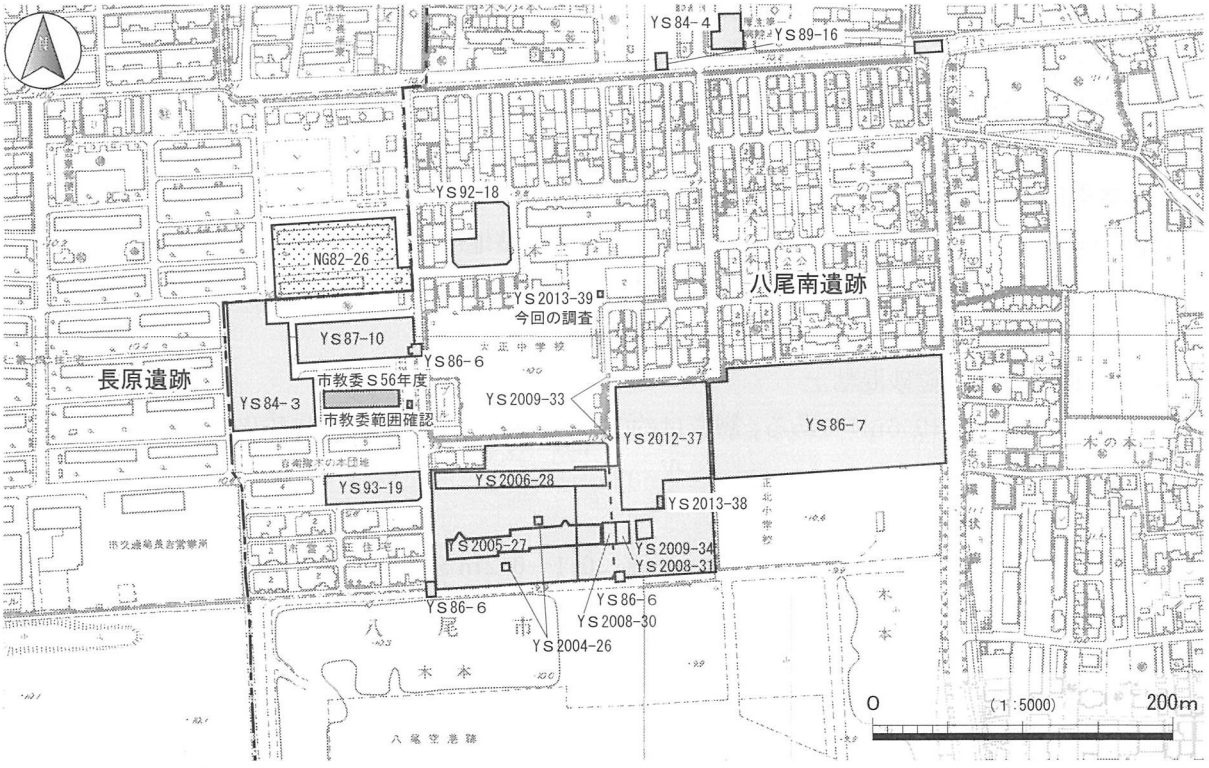
Ⅷ　八尾南遺跡第39次調査（ＹＳ2013－39）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する八尾南遺跡は、本市の南西部、現在の行政区画では、西木の本一～四丁目、若林町一～三丁目の東西約0.5㎞、南北約1.3㎞がその範囲とされている。地形的には、遺跡の大部分を旧大和川水系により形成された沖積平野が占めるほか、南端部には羽曳野丘陵から派生した河内台地が、西端部には河内台地からさらに連なる上町台地が展開している。現地表面高は、遺跡南端部が最も高くT.P.+12.0m前後、北端部が最も低くT.P.+10.0m前後である。比高差は約2.0mを測り、南から北に傾斜する。

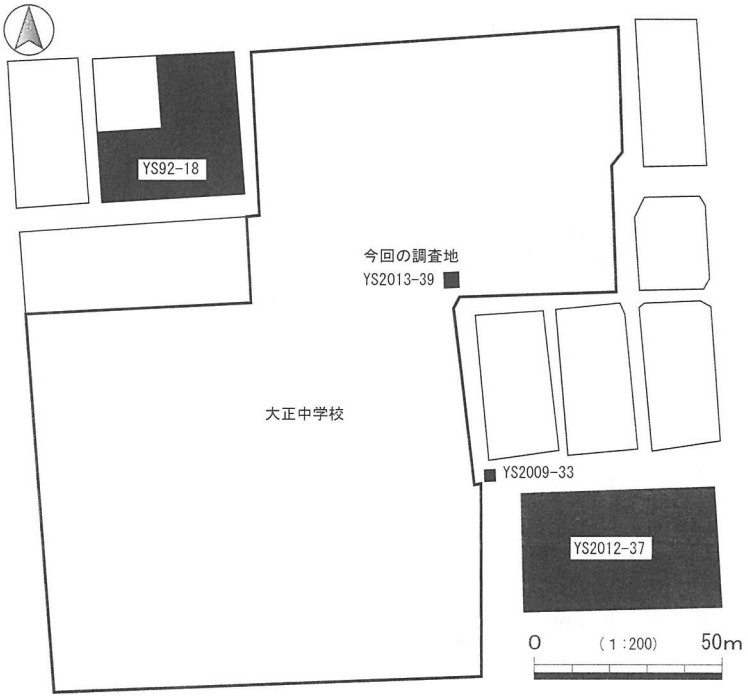
八尾南遺跡は、1973(昭和48)年の地下鉄八尾南駅建設工事により発見された遺跡である。これを受けて行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査では、弥生～古墳時代の居住域や墓域に伴う遺構、遺物が多数検出された。その後、大阪府教育委員会をはじめ、(財)大阪府文化財センター、八尾市教育委員会、当調査研究会により断続的に調査が行われ、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡として認識されるようになった。

本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が密集している。北東部～南東部には弥生時代～中世の複合遺跡である木の本遺跡や太田遺跡が存在するほか、北部～西部には旧石器時代～中世の複合遺跡で、本遺跡と各時代を通じて連続性が認められる長原遺跡が隣接している。



調査地周辺図

今回の調査地の周辺では、北西約80mの第18次調査地で古墳時代中期の居住域を確認しており、同時期の韓式系土器が多数出土している(原田2008)。また、南約50mの第33次調査では、古墳時代中期の遺物包含層を確認している。さらに、南東約150mの第７次調査では、古墳時代前期、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代初頭にかけての生産域の存在(西村1993)が明らかになっている。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は、大正中学校校舎改築に伴うもので、当研究会が八尾南遺跡で実施した第39次調査にあたる。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表(T.P.＋10.1m前後)下3.0m前後までを重機と人力を併用して掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は１ヶ所(東西長約3.0m、南北長約3.0mの正方形)で、面積は約9.0㎡を測る。調査で使用した標高の基準は、八尾市街区多角点20C32（調査地南部：T.P.+10.005m)である。

２）基本層序

現地表(T.P.+10.1m前後)下0.6m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(０層)である。以下現地表下3.0m前後までの2.5m間において10層(１～10層)の基本層序を確認した。

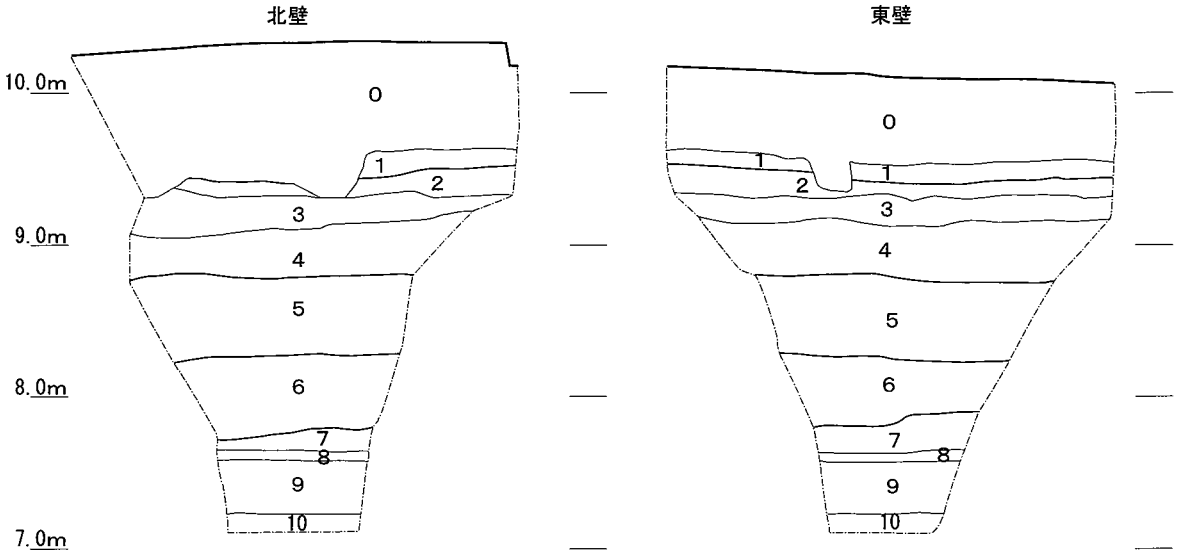
０層：現代の整地に伴う客土・盛土層、および攪乱

１層：10YR4/4褐色細粒砂混粘土
旧作土層(T.P.+9.6m)である。層厚は約0.2mを測る。全体的に雲状酸化鉄分の沈着を確認した。

２層：10YR6/1褐灰色シルト混粘土
作土層(T.P.+ 9.4～9.5m)である。層厚は0.1～0.2mを測る。全体的に雲状酸化鉄分の沈着を確認した。土師器の細片が極少量出土した(第１面)。

３層：5B5/1青灰色粘土
湿地性堆積層(T.P.+9.3m)である。層厚は0.2mを測る。

４層：5B6/1青灰色細粒砂～シルト
河川堆積層(T.P.+9.1～9.2m)である。層厚は0.3～0.4mを測る。土師器の細片が極少量出土した。



０層：現代の整地に伴う客土・盛土層、および撹乱
１層：10YR4/4褐色細粒砂混粘土　旧作土層
２層：10YR6/1褐灰色シルト混粘土　作土層
３層：5B5/1青灰色粘土　湿地性堆積層
４層：5B6/1青灰色細粒砂～シルト　河川堆積層
５層：N4/0灰色粘土　湿地性堆積層
６層：5Y5/1灰色細粒砂～シルト　河川堆積層
７層：10BG6/1青灰色粘土　湿地性堆積層
８層：5Y6/1灰色細粒砂　河川堆積層
９層：N3/0暗灰色粘土　湿地性堆積層
10層：5Y6/1青灰色シルト　河川堆積層

0　(1:50)　1m

第３図　断面図

５層：N4/0灰色粘土

湿地性堆積層(T.P.+8.8m)である。層厚は0.6mを測る。炭酸鉄が斑点状に沈着している。上部は撹拌を受け土壌化した耕作土である。古代の作土層に比定できる(第２面)。

６層：5Y5/1灰色細粒砂～シルト

河川堆積層(T.P.+8.2～8.3m)である層厚は0.3～0.5mである。土師器細片が少量出土した(第３面)。

７層：10BG6/1青灰色粘土

湿地性堆積層(T.P.+7.8～7.9m)で、上面は土壌化している。層厚は0.2cmを測る(第４面)。

８層：5Y6/1灰色細粒砂

河川堆積層(T.P.+ 7.65m)である。層厚は0.1mを測る。

９層：N3/0暗灰色粘土

湿地性堆積層(T.P.+7.55m)である。層厚は0.3m前後を測る。

10層：5Y6/1青灰色シルト

河川堆積層(T.P.+7.2m)である。層厚は0.1m以上を測る。

３）検出遺構と出土遺物

第１面で近世の作土層、第２面で中世の土壌化層、第３面で古墳時代中期～後期の河川、第４面で古墳時代中期に相当する土壌化層を確認した。

第３面で検出した河川の床は、南東がT.P.+7.9m、北西がT.P.+7.7mで、北西へ徐々に低くなることが判った。

３．まとめ

今回の調査では、４面(第１～４面)の土壌化層を確認した。第４面(７層上面)は古墳時代中期の土壌化層に相当するが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。本地から北西へ約70mの第18次(YS92-18)調査では、T.P.+7.8m前後で古墳時代中期の遺構や遺物包含層を確認し、土師器、須恵器、韓式系土器などが多数出土している。また、南約50mの第33次(YS2009-33)調査の２区では、T.P.+8.2mで５世紀の土師器を含む遺物包含層を確認している。さらに、南東約200mの第７次(YS86-７)調査ではT.P.+8.0mで生産域(水田)を検出した。従って、本地の第３面で確認した河川より南西部に古墳時代中期の居住域が展開していたと推測できる。

第２面は古代に比定できる作土層で、同時期の作土層は第７次と第33次で確認している。また、第１面は近世に比定でき作土層で、同時期の作土層は第33次で確認した。以上から古代・近世の本地周辺には生産域が広がっていた可能性が高いと考えられる。

【参考文献】

・西村公助1993「Ⅵ　八尾南遺跡第７次調査(YS86-７)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41(財)八尾市文化財調査研究会

・原田昌則2008『八尾南遺跡第18次調査報告書』―大阪防衛施設局共同住宅建て替え工事に伴う―　(財)八尾市文化財調査研究会報告117　(財)八尾市文化財調査研究会

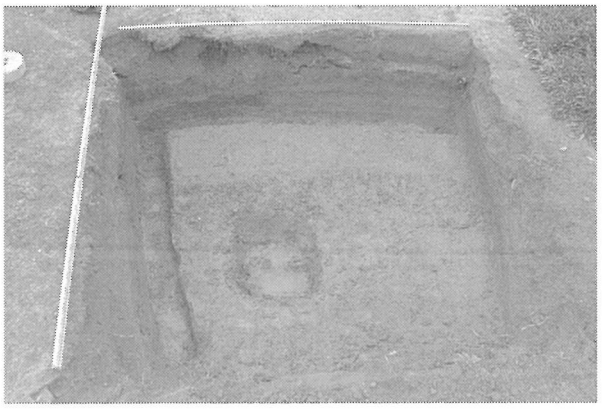
・西村公助2010「Ⅲ　八尾南遺跡第33次調査(YS2009-33)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告131』(財)八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地周辺（南西から）

調査前（北西から）

機械掘削（南西から）



第１面【２層上面】（西から）

第２面【５層上面】（西から）

第３面【６層上面】（西から）

第４面【７層上面】（西から）

東壁０～10層（西から）

報告書抄録

ふりがな	おおたけいせき　かやふりじないちょう　こおりがわいせき　こざかあいいせき　たいなかいせき　みずこしいせき　やおみなみいせき
書　　名	大竹遺跡　萱振寺内町　郡川遺跡　小阪合遺跡　田井中遺跡　水越遺跡　八尾南遺跡
副 書 名	
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	147
編著者名	Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ～Ⅷ－西村公助（編）　Ⅲ・Ⅳ－坪田真一　Ⅴ－樋口　薫
編集機関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2015年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
大竹遺跡（おおたけいせき）（第３次調査）	大阪府八尾市大竹七丁目地内（おおさかふやおしおおたけ／ななちょうめ）	27212	56	34度38分20秒	135度38分46秒	20140225	約15.0	記録保存調査
萱振寺内町（かやふりじないちょう）（第１次調査）	大阪府八尾市萱振町六丁目47（おおさかふやおしかやふりちょう／ろくちょうめ）	27212	9493	34度38分27秒	135度36分21秒	20121219～20130109	約27.0	記録保存調査
郡川遺跡（こおりがわいせき）（第22次調査）	大阪府八尾市黒谷二丁目地内（おおさかふやおしくろたに／にちょうめちない）	27212	60	34度37分12秒	135度38分17秒	20150204	約10.0	記録保存調査
小阪合遺跡（こざかあいいせき）（第47次調査）	大阪府八尾市山本町南七丁目地内（おおさかふやおしやまもとちょう／みなみなちょうめちない）	27212	40	34度37分16秒	135度37分７秒	20140106～20140107	約15.0	記録保存調査
田井中遺跡（たいなかいせき）（第21次調査）	大阪府八尾市田井中三丁目地内（おおさかふやおしたいなか／さんちょうめちない）	27212	69	34度36分８秒	135度36分24秒	20131226	約9.0	記録保存調査
水越遺跡（みずこしいせき）（第17次調査）	大阪府八尾市水越二丁目　大字大窪地内（おおさかふやおしみずこし／にちょうめ／おおあざおおくぼちない）	27212	42	34度38分２秒	135度38分10秒	20141002～20150114	約32.0	記録保存調査
八尾南遺跡（やおみなみいせき）（第37次調査）	大阪府八尾市西木の本四丁目１番５（おおさかふやおしにしきもと／よんちょうめ）	27212	67	34度36分１秒	135度34分59秒	20121120～20121121	約43.75	記録保存調査
八尾南遺跡（やおみなみいせき）（第39次調査）	大阪府八尾市西木の本三丁目83番123番及び西木の本四丁目１番２（おおさかふやおしにしきもと／さんちょうめ／にしきもとよんちょうめ）	27212	67	34度36分３秒	135度34分57秒	20131226～20131227	約9.0	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
大竹遺跡（おおたけいせき）（第３次調査）	集落				
萱振寺内町（かやふりじないちょう）（第１次調査）	寺内町	平安時代後期～末期 鎌倉時代後期～室町時代 近代	井戸 井戸 井戸	土師器、瓦器 土師器、瓦質土器 磁器	
郡川遺跡（こおりがわいせき）（第22次調査）	集落				
小阪合遺跡（こざかあいいせき）（第47次調査）	集落	弥生時代後期	落ち込み	弥生土器	
田井中遺跡（たいなかいせき）（第21次調査）	集落	古墳時代中期	作土層		
水越遺跡（みずこしいせき）（第17次調査）	集落				
八尾南遺跡（やおみなみいせき）（第37次調査）	集落	中世 近世 近代	作土層 作土層 作土層		
八尾南遺跡（やおみなみいせき）（第39次調査）	集落	古墳時代中期 古墳時代中期～後期 中世 近世	河川		

要約	萱振寺内町第１次では、平安時代末の井戸を検出し居住域の存在が明らかになった。小阪合遺跡第47次では、弥生時代後期の遺構を検出した。田井中遺跡第21次では、古墳時代中期に比定される作土層を確認した。八尾南遺跡第39次では、古墳時代中期～後期の河川を確認した。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告147

Ⅰ　大竹遺跡（第３次調査）
Ⅱ　萱振寺内町（第１次調査）
Ⅲ　郡川遺跡（第22次調査）
Ⅳ　小阪合遺跡（第47次調査）
Ⅴ　田井中遺跡（第21次調査）
Ⅵ　水越遺跡（第17次調査）
Ⅶ　八尾南遺跡（第37次調査）
Ⅷ　八尾南遺跡（第39次調査）

発　行　　平成27年３月
編　集　　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX（072）994－4700

印　刷　　古賀印刷株式会社
表紙　レザック66　　＜260kg＞
本文　マットコート　＜ 70kg＞
図版　マットコート　＜ 70kg＞